

2 周溝をもつ建物の分類と系譜

(1) はじめに

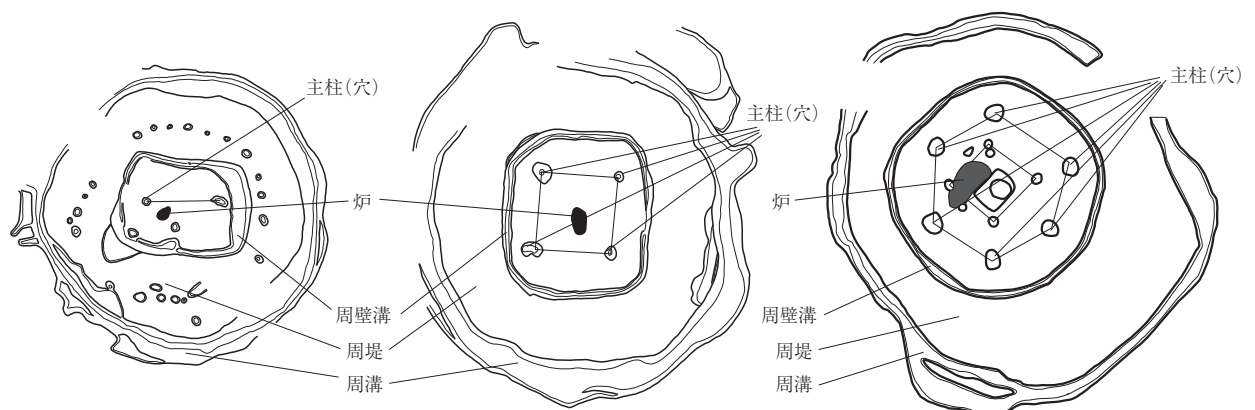
下老子笹川遺跡では、いわゆる「周溝をもつ建物」を19棟発掘した。周溝をもつ建物は北陸地方（以下、地方の表記は略し、「北陸」・「東北」などとする）で数多く発掘され、北陸固有の建物形式とされている。しかし、近年は、東北から九州まで広範囲に発見され資料が増加している。特に、関東では次項で触れるとおり方形周溝墓か住居かで、激しい論戦がされている。本節では下老子笹川遺跡をはじめとする北陸と各地の周溝をもつ建物を比較検討し、その系譜と展開を見ていきたい。さらにその中で下老子笹川遺跡の周溝をもつ建物の位置づけを見直すこととし、考察の一部としたい。

(2) 研究史

周溝をもつ建物の研究は、北陸において始まったと言える。周溝をもつ建物が最初に発掘されたのは、1968年に行われた富山県高岡市石塚遺跡の調査での遺構と考えられ直径14mに溝が回り中心部分に6箇所のピットを有していた。しかし、報告等^(注1)ではこの遺構は「環状遺構」とされ、遺構の性格は不明であり、土師器第Ⅳ様式（古墳中期）のものとしている。1974年に石川県寺中遺跡において発掘された「半環状」に連なる土坑は墓として解釈された^(注2)。「建物」として認識されたのは1979年に発行された高橋 保氏らによる新潟県下谷地遺跡の報告^(注3)においてである。環状土坑群を「周溝をもつ住居跡」と呼称し、周溝は除湿用であるとされた。

これ以降、北陸では調査例も増加し、その性格をめぐる様々な解釈がされ、論考も多い。

次に、主なものを発表年順に概観する。1987年、檜田 誠氏は柱穴と周溝を切り離して考えられ、周溝は「住居外施設」と考えられた^(注4)。また、溝で囲まれる建物の性格の特殊性について指摘された。1989年、楠 正勝氏は、西日本の竪穴住居に影響を受け成立し弥生中期では多主柱で弥生後期には4本主柱に定形化すること、低湿地のみに立地し登呂遺跡の平地式住居に類似すること、掘立柱建物と共存し集落の中心的な建物となっていること、以上3点の重要な指摘をされた^(注5)。一方、1990年、栃木英道氏はすべてが平地住居ではなく外郭溝を有する竪穴建物の可能性もあるとし、詳細な比較検討が必要であると指摘された^(注6)。1991年、田嶋明人氏は環状にめぐる土坑列と幅広溝が巡るタイプの2種類に分け、前者が先行するとされ、細い溝のめぐるタイプも類似の遺構として注目すべきとされている^(注7)。また同年、南 久和氏は、他の溝への連続の有無と断面形態で分類され、「細深タイプ」を「周溝をもつ建物」の一類型とされた^(注8)。1992年、久田正弘氏は「周溝を持つ平地式建物」と呼称し、北陸の集成をされた^(注9)。1993年に浜崎悟司氏は「周溝掘削土を内側に積み上げ（て周堤を築い）た」



第1図 周溝をもつ建物の部分名称

構造であるとされ、初めて周堤の存在を推定された^(注10)。1994年、栃木氏は、建物を堅穴系建物と掘立柱建物に分類し、堅穴系建物をさらに「周壁盛土式堅穴系建物」（周溝をもつ建物）と「堅穴式建物（周壁地山式）」に分類された^(注11)。1996年に筆者らは、下老子笹川遺跡の発掘調査で、堅穴建物であるが周堤の残存する周溝をもつ建物群を確認した。この周堤は堅穴部掘削土のほか周溝掘削土も利用していた。このため、1997年、筆者はこの堅穴建物を周溝をもつ建物に加えた^(注12)。2003年、筆者は堅穴建物と周溝をもつ建物の構造が同じであると考え、両者の柱穴配置を比較し、共通すると考え、平地式の周溝をもつ建物の屋内部の範囲を検討した^(注13)。また挙げた以外にも、出越茂和氏^(注14)・久保有希子氏^(注15)等の考察がある。

「周溝を持つ（有する）建物」は北陸以外でも各地で確認され、研究が行われている。筆者の文献収集の不十分さがあると思われる重要な論考でも抜けていると思われるが、次に簡単に触れておく。

関東でも周溝をもつ建物のような遺構が多く確認され方形周溝墓または殯施設とされていた。これに対し、1998年から2000年にかけて及川良彦氏^(注16)・飯島義雄氏^(注17)は関東の方形周溝墓のなかには北陸にみられる周溝をもつ建物がみられると問題提起され、方形周溝墓の再検討の必要性を説かれた。この問題提起に対し、福田 聖氏・長瀬 出氏^(注18)らは、慎重にこの種の遺構を検討し、再度、方形周溝墓の検討をされた。駒見佳容子氏は関東にも周溝をもつ建物があることを認めた上で、さらに詳細な検討が必要であるとされた^(注19)。2003年、石守 晃氏は群馬県の類例を集成・検討し、周溝の平面形態（「周溝ライン」）により「囲繞形」・「開口形」・「馬蹄形」に分類し、北陸・南関東・東海の他地域から持ち込まれた建築技法の影響がみられるとされた^(注20)。

一方、東海では、1999年から始まった岡村 渉氏らによる静岡県特別史跡登呂遺跡の再調査では、以前の発掘で確認されていた周堤の外側に周溝が確認された^(注21)。2002年、松井一明氏は静岡県内の周溝をもつ建物を分類・集成され、集落構造の分析を行われた^(注22)。

近畿では、1990年に森田克行氏が土坑や周溝を玉作りに利用した工房と考えられ、玉作り技法の伝播とともにある建物とされている^(注23)。1999年、近藤 広氏は滋賀県における「平地式建物」（周溝をもつ建物を含む）及び集落を検討し、玉作り工房という観点から地域関係を考えられた^(注24)。

九州では、武田光正氏が周溝を通して周堤の存在を考えられた^(注25)。

（3）周溝をもつ建物の形式分類

それでは、北陸と各地方の周溝をもつ建物を比較検討し、系譜をみていくこととするが、まず周溝をもつ建物を分類する。

A 分類1 構造による住居形式分類については宮本長二郎氏が旧石器時代から近世の類型の変遷^(注26)を提示されている。しかし、ここではまず、以前筆者が行った立体構造による分類^(注27)を修正し、以下の4形式に1次分類する。

広溝式堅穴住居 床面は地表面より下だが堅穴住居よりも浅い。幅広の周溝がある。周堤は屋内部と周溝の両方の掘削土により築かれる。

狭溝式堅穴住居 床面レベルと周堤の構築方法は堅穴住居と同様。周壁から離れた位置に狭い溝が巡るが、周堤の構築に主体的には利用されなかったと考えられる。














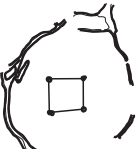






広溝式平地住居 床面は地表面と同じレベル。幅広の周溝がある。周堤は周溝の掘削土のみで築く。

狭溝式平地住居 床面は地表面と同じレベル。周堤は無いが、幅が狭い溝が柱穴の外側に巡る。

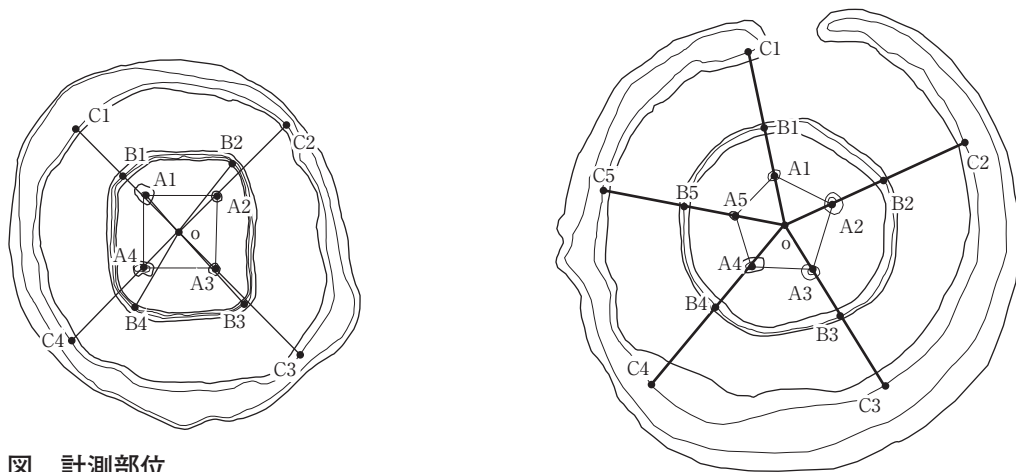
筆者は、堅穴住居・広溝式堅穴住居・広溝式平地住居は床面のレベルがそれぞれ異なるが、共通した立体構造であると考えている。また広溝、狭溝の溝幅であるが筆者の拙稿^(注12)では50cm以下を狭溝と

していたが、本稿では70cm以下と修正したい。

B 分類2 さらに2次の形式分類として、石守 晃氏の「周溝ライン」による分類（「開口型」・「囲繞型」・「馬蹄型」）^(注20)に「土坑型」と「共有型」を加えた周溝平面形による分類に主柱の本数分類を組み合わせる。分類1と分類2による形式分類は第2図のとおりである。

分類2 分類1	土坑型	開口型	囲繞型	馬蹄型	共有型
広溝式平地建物	 多主柱	 4本主柱  多主柱	 多主柱		
広溝式竪穴建物	 多主柱	 4本主柱  多主柱	 2本主柱  4本主柱  多主柱	 2本主柱  多主柱	 4本主柱
狭溝式平地建物		 4本主柱  多主柱		 多主柱	
狭溝式竪穴建物		 2本主柱  4本主柱  多主柱		 4本主柱	

第2図 周溝を持つ建物の形式分類



第3図 計測部位

土坑型 土坑が周溝状に巡り周溝幅が不安定か、周溝幅が一定であっても3箇所以上途切れるもの。

拙稿^(注28)の「土坑式-」にあたる。

開口型 周溝幅が一定で、周溝の一部が広く途切れ、陸橋のようなもの。

圍繞型 周溝幅が一定で、周溝が途切れず一周するもの。

馬蹄型 周溝幅が一定で、周溝端が大きく開放し、馬蹄形を呈するもの。

共有型 他の建物と周溝を共有するもの。

(4) 周溝をもつ建物の法量

ここでは、型式変化の方向や地域間の比較を行うため、主柱・周壁・周溝の位置等を数値データ化するが、まずその方法を説明する。

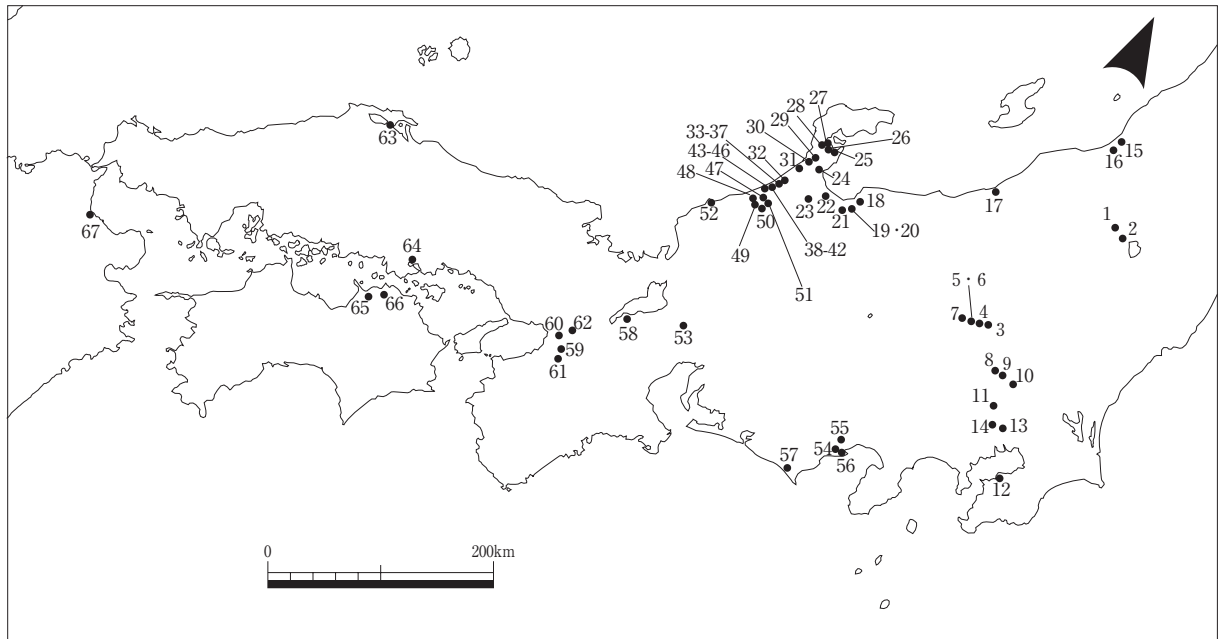
主柱・周壁・周溝の位置関係は、建物の主柱、周壁が都出比呂志氏の「住居設計原理」^(注29)の「求心構造」もしくは「対称構造」に位置すると考え、建物の中心から主柱穴までを柱穴半径、中心から周壁溝外側下端までを周溝半径、周溝上端間を周溝幅として各遺構の平面図から計測した。しかし、実際は多少のブレがあるため、第3図のとおり建物の中心を0点とし、主柱穴中心をAx地点、周壁角の下端^(注30)をBx地点、周溝の内側下端をCx地点(Ax・Bx・Cxのxは、主柱穴の数の通し番号^(注31))とし、柱穴半径はAxの平均、周壁半径はBxの平均を、周溝半径はCxの平均とした。周溝幅は、4箇所程度を平均した。次に柱穴半径を横軸にとり、周溝半径を縦軸にとりその位置関係を示したグラフと壁半径を横軸にとり周溝半径を縦軸にとったグラフを作成し、その位置関係をみていく。また、柱穴半径を横軸にし、周溝幅を縦軸にしたグラフも作成した。

(5) 各地の周溝をもつ建物

東北から九州まで68遺跡132棟の柱穴、周溝の残存状況が良好な周溝をもつ建物を第1～3表のとおり集成し、前節までに説明した観点と時期及び立地について報告書等から調べデータ化した。本稿では、用いる時期区分は大まかに弥生時代中期、弥生時代後期、弥生時代終末期、古墳時代の4時期に区分する(以下、弥生中期、弥生後期、弥生終末期、古墳期とそれぞれ表記する)。必要があるときは該当の土器形式を用いる。また、立地については報告書等では様々な表現がされているが、本稿では、扇状地・沖積平野・湿地などを低地とし、丘陵・台地などを高地と二分して表す。また、集成にあたっては、筆者の文献収集が不十分なため及川良彦氏、松井一明氏、武田光正氏のされた全国的収集成果がありこれを使用させて頂いたことをことわっておく。

以下に周溝をもつ建物を地方別にみていくこととするが、遺構名は第1～3表の表記を用いる。

A 北陸(第5～10図) 北陸は類例が多く、管見では170棟余りの周溝をもつ建物がある。このうち



第4図 遺跡位置図

1 樋渡台畑遺跡, 2 屋敷遺跡, 3 三和工業団地I遺跡, 4 中内村前遺跡, 5 横手早稲田遺跡, 6 横手湯田遺跡, 7 上之手八王子遺跡, 8 北島遺跡, 9 小敷田遺跡, 10 小沼耕地遺跡, 11 鍛冶谷・新田口遺跡, 12 高砂遺跡, 13 豊島馬場遺跡, 14 舟渡遺跡, 15 道端遺跡, 16 西川内南遺跡, 17 下谷地遺跡, 18 佐伯遺跡, 19 江上A遺跡, 20 江上B遺跡, 21 浦田遺跡, 22 H S - 0 4 遺跡, 23 下老子笹川遺跡, 24 中谷内遺跡, 25 万行赤岩遺跡, 26 藤橋遺跡, 27 奥原遺跡, 28 三引E遺跡, 29 藤井サンジョガリ遺跡, 30 二口かみあれた遺跡, 31 宿東山遺跡, 32 梅田B遺跡, 33 千田遺跡, 34 磯部遺跡, 35 沖町遺跡, 36 西念・南新保遺跡, 37 戸水B遺跡, 38 新保本町西遺跡, 39 新保本町東遺跡, 40 上荒屋遺跡, 41 長池ニシタンボ遺跡, 42 横江古屋敷遺跡, 43 八田小鮎遺跡, 44 旭小学校遺跡, 45 宮永遺跡, 46 浜竹松B遺跡, 47 高堂遺跡, 48 平面梯川遺跡, 49 漆町遺跡, 50 八幡遺跡, 51 八里向山遺跡, 52 下屋敷遺跡, 53 今宿遺跡, 54 登呂遺跡, 55 川合遺跡, 56 汐入遺跡, 57 川田・東原田遺跡, 58 下長遺跡, 59 瓜生堂遺跡, 60 八雲遺跡, 61 尺度遺跡, 62 紅茸遺跡, 63 勝負遺跡, 64 百間川原尾島遺跡, 65 矢ノ塚遺跡, 66 川津東山田遺跡, 67 団後遺跡

番号	遺構名	表記	分類1	分類2	時期	立地	文献
1	樋渡台畑遺跡SI01, SD 01a・01b	樋渡台畑.01	狭溝堅穴	馬蹄4	古墳前	高地	注32
2	樋渡台畑遺跡SI02, SD02	樋渡台畑.02	狭溝堅穴	馬蹄4	古墳前	高地	〃
3	屋敷遺跡11号住居跡, 4・周溝状遺構	屋敷.11	広溝平地	土坑4	弥生後	低地	注33
4	上之手八王子遺跡BH-102	上之手八王子.102	狭溝堅穴	開口4	古墳前		注34
5	上之手八王子遺跡BH-116	上之手八王子.116	広溝堅穴	馬蹄4	古墳前		〃
6	上之手八王子遺跡BH-176	上之手八王子.176	狭溝堅穴	開口4	古墳前		〃
7	三和工業団地I遺跡12号住居	三和工業団地I.12	狭溝堅穴	馬蹄4	古墳前	低地	注35
8	横手早稲田遺跡4号住居	横手早稲田.4	広溝堅穴	開口4	古墳前	低地	注36
9	横手早稲田遺跡6号住居	横手早稲田.6	広溝堅穴	馬蹄4	古墳前	低地	〃
10	横手湯田遺跡A区第13面1号住居跡	横手湯田.1	広溝平地	開口4	古墳前	低地	注37
11	中内村前遺跡7-3-3号住居	中内村前.733	広溝堅穴	開口4	古墳前	低地	注38
12	中内村前遺跡7-3-7号住居	中内村前.737	広溝堅穴	圍繞4	古墳前	低地	〃
13	鍛冶谷・新田口遺跡第40号方形周溝墓, 住居16	鍛冶谷・新田口.16	狭溝堅穴	開口4	弥生後	低地	注39
14	鍛冶谷・新田口遺跡V次1号方形周溝墓	鍛冶谷・新田口.5-1	広溝平地	開口4	古墳前	低地	注40
15	小敷田遺跡第5号方形周溝墓, SB4	小敷田.5	狭溝平地	開口4	古墳前	低地	注41
16	小敷田遺跡9号方形周溝墓, SB6	小敷田.9	広溝平地	開口4	古墳前	低地	〃
17	小沼耕地遺跡第1号方形周溝墓	小沼耕地.1	広溝平地	開口4	古墳前	低地	注42
18	小沼耕地遺跡第3号方形周溝墓	小沼耕地.3	広溝平地	開口4	古墳前	低地	〃
19	北島遺跡第279号住居跡	北島.279	狭溝堅穴	圍繞4	古墳前	低地	注43
20	高砂遺跡SZ006, SB002	高砂.002	広溝平地	開口4	弥生後	低地	注44
21	豊島馬場遺跡SH09	豊島馬場.09	広溝平地	開口4	古墳前	低地	注45
22	豊島馬場遺跡SH105	豊島馬場.105	広溝平地	開口4	古墳前	低地	〃
23	豊島馬場遺跡SH129	豊島馬場.129	広溝平地	開口4	古墳前	低地	〃
24	豊島馬場遺跡SH135	豊島馬場.135	狭溝平地	開口4	古墳前	低地	〃
25	舟渡遺跡第2地点1号方形周溝墓	舟渡.1	広溝平地	開口4	古墳前		注46
26	下谷地遺跡1号	下谷地.1	広溝平地	土坑多	弥生中後	低地	注47
27	下谷地遺跡2号(内側周溝)	下谷地.2内	広溝平地	土坑多	弥生中後	低地	〃
28	下谷地遺跡3号(内側柱)	下谷地.3内	広溝平地	土坑多	弥生中後	低地	〃
29	下谷地遺跡4号(内側周溝)	下谷地.4内	広溝平地	土坑多	弥生中後	低地	〃
30	下谷地遺跡2号(外側周溝)	下谷地.2外	広溝平地	土坑多	弥生中後	低地	〃
31	下谷地遺跡4号(外側周溝)	下谷地.4外	広溝平地	土坑多	弥生中中	低地	〃
32	下谷地遺跡3号(外側柱)	下谷地.3外	広溝平地	土坑多	弥生中中	低地	〃
33	道端遺跡1号円形周溝状遺構	道端.1	広溝平地	開口4	古墳前	低地	注48
34	西川内南遺跡1号円形周溝状遺構	西川内南.1	広溝平地	開口4	古墳前	低地	注49
35	西川内南遺跡2号円形周溝状遺構	西川内南.2	広溝平地	圍繞4	古墳前	低地	〃

第1表 周溝をもつ建物一覧(1)

2 周溝をもつ建物の分類と系譜

番号	遺構名	表記	分類 1	分類 2	時期	立地	文献
36	佐伯遺跡SB042	佐伯.042	狭溝堅穴	囲繞多	弥生後	高地	注50
37	江上A遺跡SB14	江上A.14	広溝平地	開口 4	弥生後	低地	注51
38	江上B遺跡SB111	江上B.111	狭溝平地	開口 4	弥生後	低地	注52
39	下老子笹川遺跡SI 1	下老子笹川.1	広溝堅穴	囲繞 4	弥生終	低地	注53
40	下老子笹川遺跡SI 2	下老子笹川.2	広溝堅穴	囲繞 4	弥生終	低地	〃
41	下老子笹川遺跡SI 3	下老子笹川.3	広溝堅穴	囲繞 4	弥生終	低地	〃
42	下老子笹川遺跡SI 4	下老子笹川.4	広溝堅穴	囲繞 2	弥生終	低地	〃
43	下老子笹川遺跡SI 7	下老子笹川.7	広溝堅穴	囲繞 4	弥生後	低地	〃
44	下老子笹川遺跡SI 9	下老子笹川.9	広溝堅穴	囲繞多	弥生後	低地	〃
45	下老子笹川遺跡SI10(新)	下老子笹川.10新	広溝堅穴	囲繞多	弥生後	低地	〃
46	下老子笹川遺跡SI11	下老子笹川.11	広溝堅穴	囲繞 4	弥生後	低地	〃
47	下老子笹川遺跡SI10(旧)	下老子笹川.10旧	広溝堅穴	開口多	弥生後	低地	〃
48	下老子笹川遺跡SI12	下老子笹川.12	広溝堅穴	開口多	弥生後	低地	〃
49	下老子笹川遺跡SI13	下老子笹川.13	広溝堅穴	開口多	弥生後	低地	〃
50	下老子笹川遺跡SI14	下老子笹川.14	広溝堅穴	開口 4	弥生後	低地	〃
51	下老子笹川遺跡SI16	下老子笹川.16	広溝堅穴	囲繞 4	弥生後	低地	〃
52	下老子笹川遺跡SI19	下老子笹川.19	広溝堅穴	開口 4	弥生後	低地	〃
53	HS-04遺跡SB01	HS-04.01	広溝平地	開口 4	古墳前	低地	注54
54	浦田遺跡SB03	浦田.03	狭溝平地	開口 4	古墳前	低地	注55
55	浦田遺跡SB04	浦田.04	狭溝平地	開口 4	古墳前	低地	〃
56	中谷内遺跡SI254	中谷内.254	狭溝堅穴	囲繞 4	古墳後	低地	注56
57	奥原遺跡第 7 号住居址	奥原.7	狭溝堅穴	囲繞 4	弥生後	高地	注57
58	万行赤岩山遺跡第 2 号堅穴住居跡	万行赤岩山.2	狭溝堅穴	開口 4	弥生終	高地	注58
59	西念・南新保遺跡 J 区 3 号住, SB01	西念・南新保.J01	広溝平地	開口多	弥生中後	低地	注59
60	西念・南新保遺跡 P 区堅穴系01	西念・南新保.P01	広溝平地	開口 4	弥生終	低地	注60
61	新保本町西遺跡 1 号住	新保本町西.1	広溝平地	開口 4	古墳前	低地	注61
62	新保本町西遺跡SB02	新保本町西.02	広溝平地	開口 4	古墳前	低地	注62
63	宮永遺跡SI61古	宮永.61古	広溝堅穴	土坑 4	弥生後	低地	注63
64	宮永遺跡SI61新	宮永.61新	狭溝堅穴	土坑多	弥生後	低地	〃
65	宮永遺跡SI84	宮永.84	広溝堅穴	開口 4	弥生後	低地	〃
66	漆町遺跡漆チュウデン地区 1 号堅穴住居跡	漆町.漆チュウデン 1	狭溝堅穴	囲繞 4	弥生終	低地	注64
67	漆町遺跡 8 号	漆町.8	広溝平地	開口 4	弥生終	低地	注65
68	漆町遺跡 9 号	漆町.9	広溝平地	開口 4	弥生終	低地	注65
69	横江古屋敷遺跡A区SI02, SD02	横江古屋敷.02	狭溝堅穴	囲繞 4	弥生終	低地	注66
70	横江古屋敷遺跡B区SB03	横江古屋敷.03	狭溝平地	囲繞多	弥生後	低地	〃
71	横江古屋敷遺跡B区SB04	横江古屋敷.04	広溝平地	開口 4	弥生中後	低地	〃
72	横江古屋敷遺跡SI502 (外周溝第 3 段階)	横江古屋敷.502-3	狭溝平地	開口多	弥生終	低地	注67
73	横江古屋敷遺跡SI502 (外周溝第 4 段階)	横江古屋敷.502-4	狭溝平地	開口多	弥生終	低地	〃
74	横江古屋敷遺跡SI502 (外周溝第 5 段階)	横江古屋敷.502-5	狭溝平地	開口多	弥生終	低地	〃
75	旭小学校遺跡SI39	旭小学校.39	狭溝堅穴	囲繞 4	古墳前	低地	注68
76	八田小鮒遺跡Ⅱ区 1 号住居址	八田小鮒.Ⅱ 1	広溝堅穴	土坑多	弥生後	低地	注69
77	浜竹松B遺跡SI16 (SD07)	浜竹松B.16	広溝堅穴	囲繞 4	古墳中	低地	注70
78	磯部運動公園遺跡 2 号建物	磯部.2	広溝平地	開口多	弥生中	低地	注71
79	上荒屋遺跡SB05	上荒屋.05	広溝平地	開口 4	古墳前	低地	注72
80	上荒屋遺跡SB06	上荒屋.06	広溝平地	開口 4	古墳前	低地	〃
81	上荒屋遺跡SB13	上荒屋.13	広溝平地	開口 4	古墳前	低地	〃
82	上荒屋遺跡SB53	上荒屋.53	狭溝堅穴	開口 4	古墳前	低地	〃
83	上荒屋遺跡SB90	上荒屋.90	狭溝平地	開口多	弥生中	低地	注73
84	上荒屋遺跡SB52	上荒屋.52	狭溝堅穴	開口 4	古墳前	低地	注72
85	新保本町東遺跡 4 号溝	新保本町東.4	狭溝平地	馬蹄多	古墳前	低地	注74
86	沖町遺跡SD01 (SB01)	沖町.01	広溝平地	開口 4	古墳前	低地	注75
87	藤橋遺跡SH-1	藤橋.1	狭溝平地	開口多	弥生後	低地	注76
88	高堂遺跡第 2 次調査 1 号建物	高堂.2-1	広溝平地	開口 4	弥生終	低地	注77
89	八幡遺跡SH-01	八幡.01	狭溝堅穴	囲繞 4	古墳前	高地	注78
90	八幡遺跡SH-03	八幡.03	狭溝堅穴	囲繞 4	弥生後	高地	〃
91	宿東山遺跡 1 号住	宿東山.1	狭溝堅穴	馬蹄 2	弥生後	高地	注79
92	宿東山遺跡10号住	宿東山.10	広溝堅穴	馬蹄 2	弥生後	高地	〃
93	平面梯川遺跡101号平地建物	平面梯川.101	広溝平地	土坑 5	弥生後	低地	注80
94	千田遺跡SB02	千田.02	広溝堅穴	開口多	弥生中後	低地	注81
95	戸水B遺跡平地式建物	戸水B.	広溝平地	囲繞多	弥生中後	低地	注82
96	長池ニシタンボ遺跡SI01a	長池ニシタンボ.01a	広溝平地	囲繞 4	弥生終	低地	注83
97	藤井サンジョガリ遺跡 1 号	藤井サンジョガリ.1	広溝平地	囲繞 4	弥生後	低地	注84

第 2 表 周溝をもつ建物一覧(2)

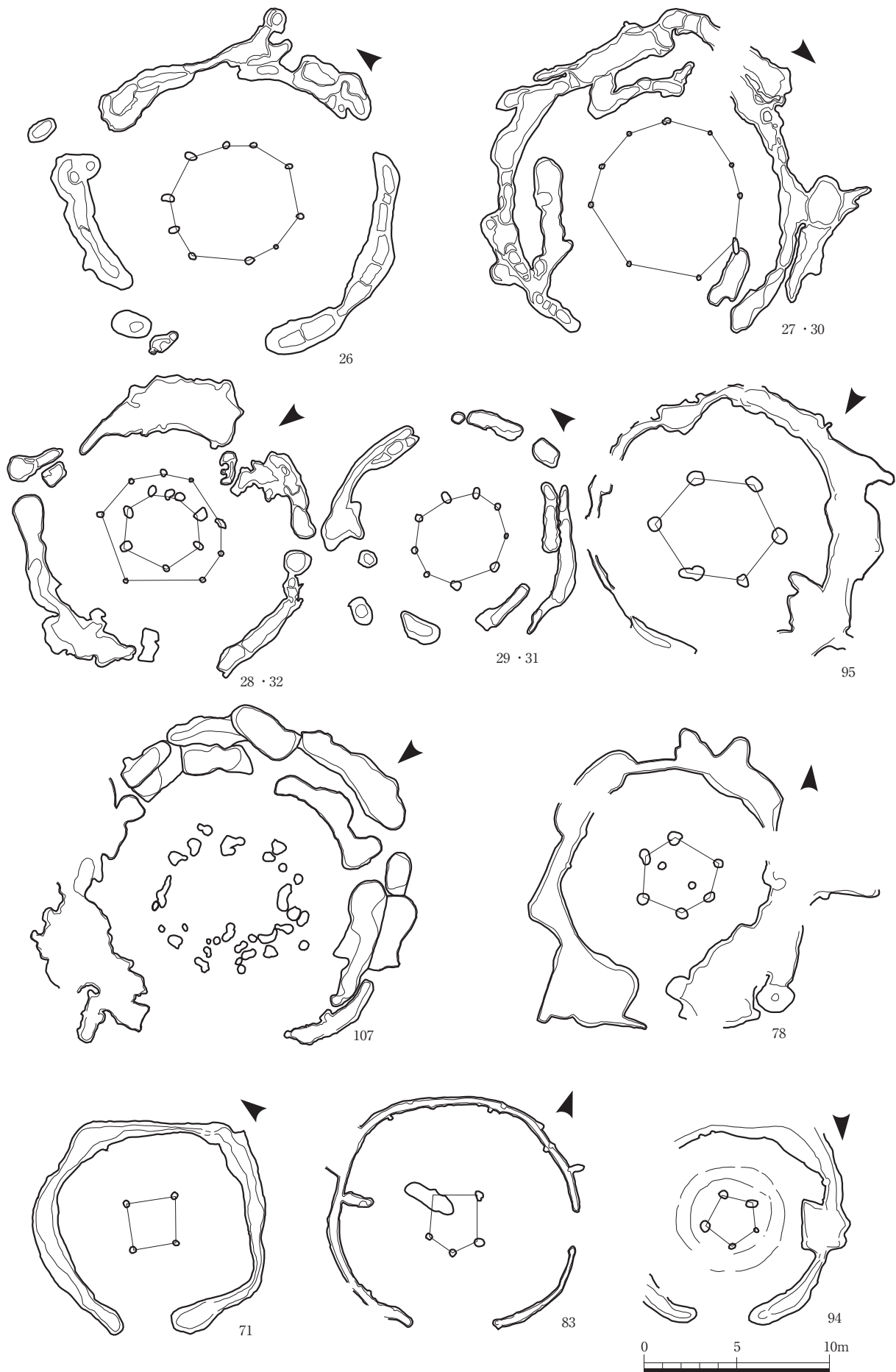
番号	遺構名	表記	分類1	分類2	時期	立地	文献
98	二口かみあれた遺跡1号建物	二口かみあれた.1	広溝平地	開口4	古墳前	低地	注85
99	二口かみあれた遺跡9号建物	二口かみあれた.9	広溝平地	開口4	古墳前	低地	〃
100	二口かみあれた遺跡2次1号建物	二口かみあれた.2-1	広溝平地	開口4	古墳前	低地	注86
101	二口かみあれた遺跡2次2号建物	二口かみあれた.2-2	狭溝平地	開口4	不明	低地	〃
102	二口かみあれた遺跡2次3号建物	二口かみあれた.2-3	広溝平地	開口4	古墳前	低地	〃
103	三引E遺跡SI01	三引E.01	狭溝平地	開口多	弥生後	高地	注87
104	三引E遺跡SI02	三引E.02	広溝平地	開口多	弥生後	高地	〃
105	梅田B遺跡堅穴建物	梅田B.	広溝堅穴	開口多	弥生後	低地	注88
106	八里向山A遺跡SI02	八里向山A.02	広溝堅穴	馬蹄多	弥生終	高地	注89
107	下屋敷遺跡住居址	下屋敷	広溝平地	土坑多	弥生中前	低地	注90
108	今宿遺跡SB01V	今宿.01	広溝堅穴	開口4	古墳前	低地	注91
109	登呂遺跡1-48号住居跡	登呂.1-48	広溝平地	共有4	弥生後	低地	注92
110	登呂遺跡1-49号住居跡	登呂.1-49	広溝平地	共有4	弥生後	低地	注93
111	川合遺跡2号住居跡SB6701	川合.2	広溝堅穴	開口4	古墳中	低地	注94
112	川合遺跡1号住居跡SB6703	川合.1	広溝堅穴	開口4	古墳中	低地	〃
113	汐入遺跡SA-01	汐入.1	広溝平地	開口4	弥生後	低地	注95
114	汐入遺跡SA-03	汐入.3	広溝平地	開口4	弥生後	低地	〃
115	川田・東原田遺跡SB19	川田・東原田.19	広溝堅穴	圍繞4	弥生後	低地	注96
116	下長遺跡SH2601, SD2602	下長.2601	広溝堅穴	圍繞4	弥生終	低地	注97
117	紅茸山遺跡住-3	紅茸山.3	狭溝堅穴	馬蹄4	弥生後	高地	注98
118	瓜生堂遺跡H地区住居址1	瓜生堂.1	狭溝平地	開口4	弥生中後	低地	注99
119	八雲遺跡1	八雲.1	広溝堅穴	土坑多	弥生中前	低地	注100
120	尺度遺跡131(建物)・127(溝)	尺度.131	広溝堅穴	圍繞4	古墳前	低地	注101
121	尺度遺跡214(建物)・193(溝)	尺度.214	広溝堅穴	開口4	古墳前	低地	〃
122	尺度遺跡368(建物)・449(溝)	尺度.368	狭溝堅穴	開口4	古墳前	低地	〃
123	勝負遺跡SI-01	勝負.01	狭溝堅穴	馬蹄4	弥生後	高地	注102
124	勝負遺跡SI-14, SD-08	勝負.14	狭溝堅穴	馬蹄4	弥生後	高地	〃
125	百間川原尾島遺跡堅穴住居9	百間川原尾島.9	狭溝堅穴	開口4	弥生後	低地	注103
126	百間川原尾島遺跡5	百間川原尾島.5	狭溝堅穴	馬蹄4	弥生終	低地	注104
127	百間川原尾島遺跡堅穴住居6	百間川原尾島.6	広溝堅穴	圍繞4	弥生後	低地	注105
128	矢ノ塚遺跡SB85000	矢ノ塚.85000	狭溝堅穴	開口4	弥生中後	低地	注106
129	川津東山田遺跡SH03, SD3201	川津東山田.03	狭溝堅穴	馬蹄多	弥生後	高地	注107
130	川津東山田遺跡SH07, SD2201	川津東山田.07	狭溝堅穴	圍繞4	弥生後	高地	〃
131	団後遺跡1号住居跡	団後.1	狭溝堅穴	馬蹄4	弥生終	高地	注108
132	原田遺跡IV-1,2号住居跡	原田.4-1.2	狭溝建物	馬蹄2	弥生終	不明	注109

第3表 周溝をもつ建物一覧(3)

残存状況が良好な82棟を検討の対象とする。

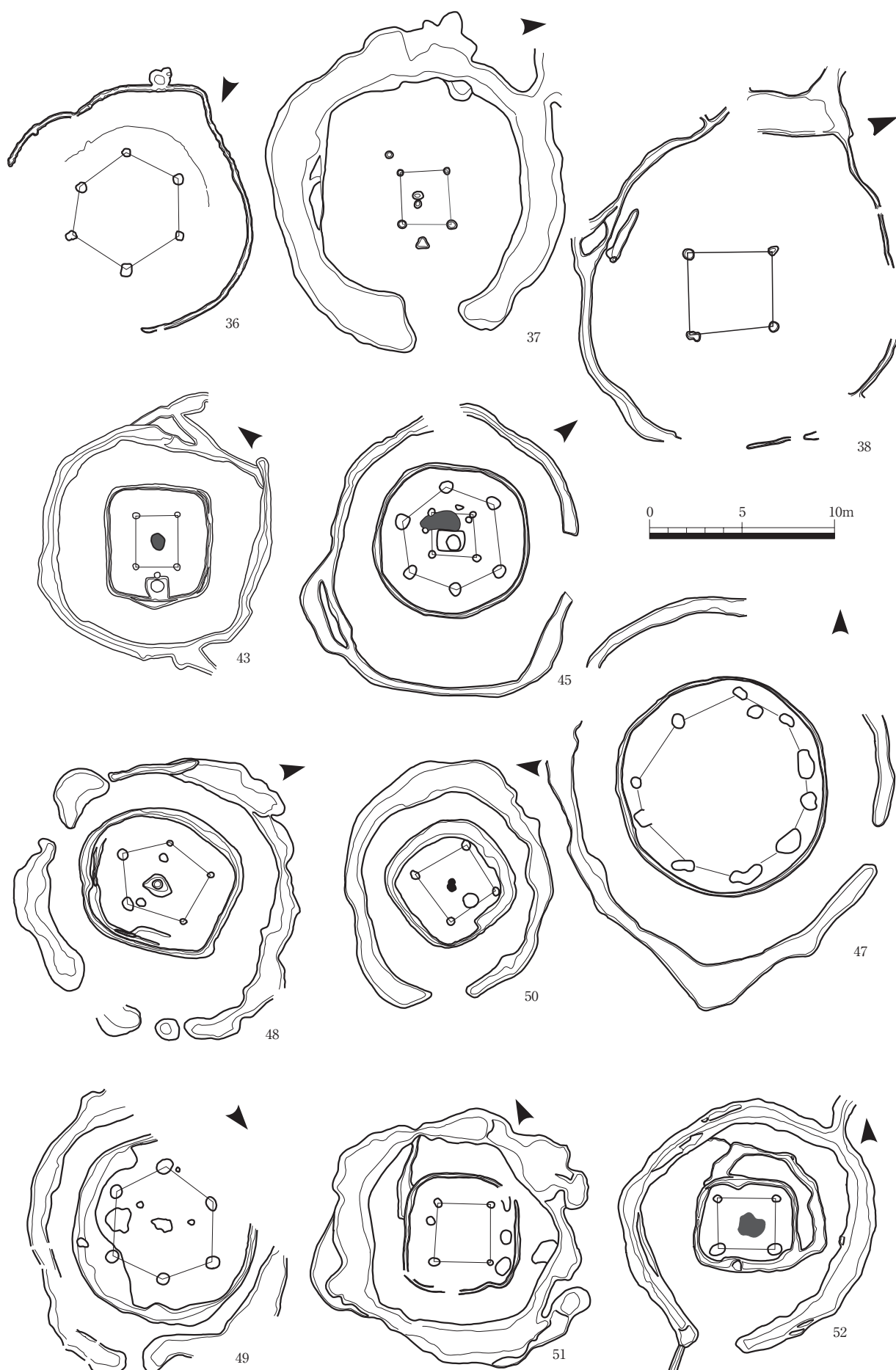
弥生中期（第5図，第10図1～3） 現在のところ北陸において最古の周溝をもつ建物は弥生中期前葉末～中期中葉初頭に位置づけられる下屋敷（107）であり，広溝式平地建物土坑型多主柱である。弥生中期では14棟があり，広溝式平地建物12棟，広溝式堅穴建物1棟，狭溝式平地建物1棟に分けられ，広溝式平地建物が大半を占める。また，この時期の堅穴建物の類例は少なく，広溝式平地建物が住居の主役を努めたと思われる。広溝式平地建物は，土坑型多主柱8棟，開口型多主柱2棟，開口型4本主柱1棟，圍繞型多主柱1棟に分けられ，土坑型が主流である。下谷地.1（26）・下谷地.2内（27）・下谷地.3内（28）・磯部.2（78）・下屋敷（107）などは土坑型であるので周溝が途切れる箇所が多いが，1箇所は大きく開く箇所があり，開口型のように出入り口を意識したものであったと思われる。狭溝式堅穴建物と狭溝式平地建物は，いずれも開口型多主柱である。

周溝柱穴比^(注110)は，下谷地.2内（27）の1.50から上荒屋.90（83）の3.72間に分布するが，平均は2.44である。このうち1.5から2までの間に分布する下谷地.1内（28）・下谷地.4外（31）・西念・南新保J01（59）は，柱穴と周溝が近いため周壁溝である可能性がある。周溝柱穴比広溝式の平均は2.34である。周溝幅柱穴比^(注111)は下谷地.2内（27）の0.21から磯部.2（78）の0.90間に分布し，平均は0.46である。周溝幅柱穴比は当然のことながら，狭溝式の平均は0.23，広溝式の平均が0.69と大きく異なっている。



第5図 北陸弥生中期の周溝をもつ建物

26 下谷地.1, 27・30 下谷地.2内・外, 28・32 下谷地.3内・外, 29・31 下谷地.4内・外,
71 横江古屋敷.04, 78 磯部.2, 83 上荒屋.90, 94 千田.02, 95 戸水B., 107 下屋敷



第6図 北陸弥生後期の周溝をもつ建物1

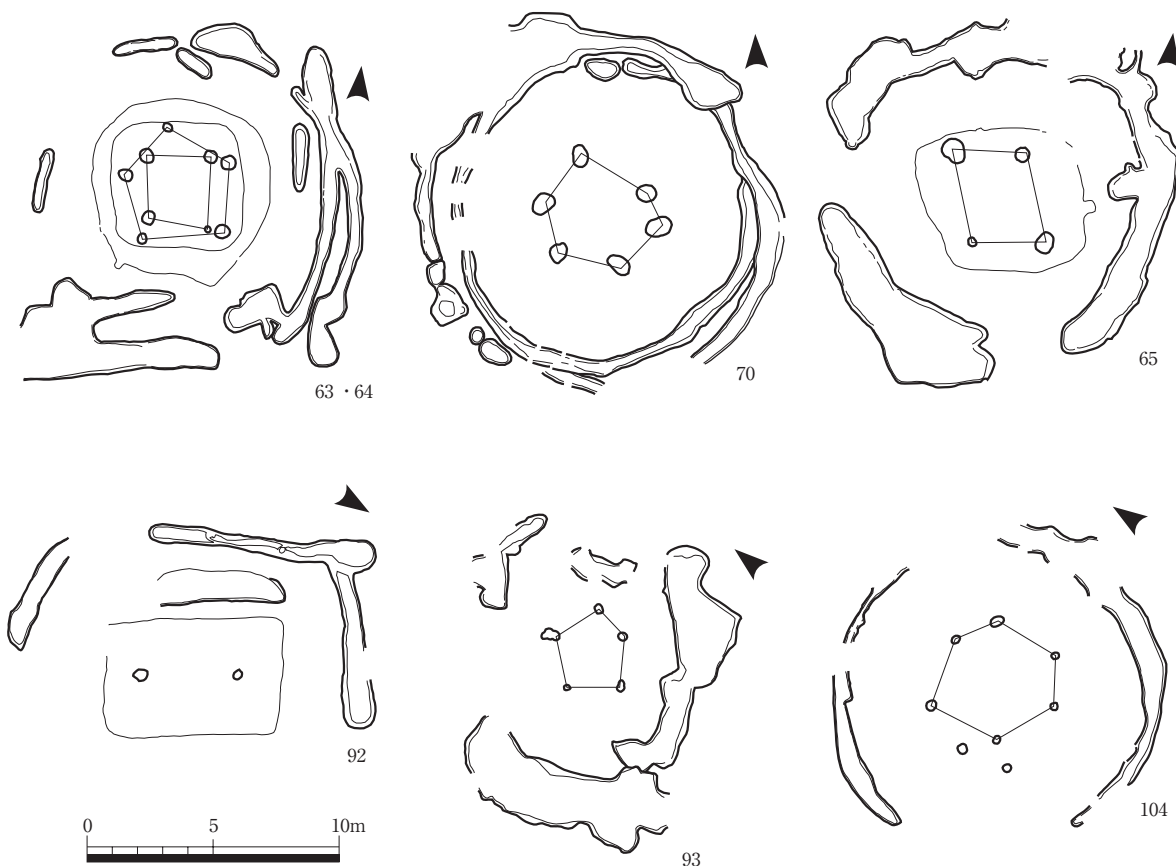
36 佐伯.042, 37 江上.A.14, 38 江上.B.111, 43 下老子笹川.7, 45 下老子笹川.10新, 48 下老子笹川.12, 47 下老子笹川.10旧, 49 下老子笹川.13, 50 下老子笹川.14, 51 下老子笹川.16, 52 下老子笹川.19

立地は建物形式にかかわらず、すべて低地である。

当期では、広溝式平地建物土坑型多主柱が大部分を占める点と広溝式と狭溝式の周溝位置の差に注目しておきたい。

弥生後期（第6・7図，第10図4～6） 弥生後期は28棟あり，広溝式竪穴建物15棟，狭溝式竪穴建物5棟，広溝式平地建物4棟，狭溝式平地建物4棟に分けられ，弥生中期と比較すると，広溝式竪穴建物が増加する。広溝式竪穴建物はさらに，開口型多主柱4棟，開口型4本主柱と圍繞型4本主柱が3棟，圍繞型多主柱2棟，土坑型多主柱・土坑型4本主柱・馬蹄型2本主柱がそれぞれ1棟ずつに分類される。狭溝式竪穴建物はさらに，圍繞型4本主柱が2棟，圍繞型多主柱・土坑型多主柱・馬蹄型2本主柱がそれぞれ1棟ずつに細分される。広溝式平地建物は，開口型4本主柱・開口型多主柱・土坑型多主柱・圍繞型4本主柱それぞれ1棟ずつに分けられる。狭溝式平地建物は，開口型多主柱・開口型4本主柱が1棟ずつである。下老子笹川遺跡の建物10棟は，すべて広溝式竪穴建物に分類され，圍繞型4本主柱・開口型多主柱が3棟，圍繞型多主柱・開口型4本主柱が2棟に細分される。

周溝柱穴比は下老子笹川.10旧（47）の1.89から下老子笹川.11（46）の4.11の間に分布し，平均は2.70で，弥生中期と比較するとやや周溝半径が大きいものが多い。広溝式と狭溝式では，平均がそれぞれ2.77と2.55で，中期で大きく開いた差が無くなり，近い値となっている。周溝周壁比^{（注112）}は奥原.7（57）1.45から宮永.61古（63）の2.25の間に分布し，平均は1.64である。広溝式竪穴建物と狭溝式竪穴建物の周溝周壁比の平均では，前者が1.65，後者が1.61で大きな差は無い。周溝幅柱穴比は佐伯.042（36）の0.09から江上A.14（37）の1.4の間に分布し，平均は0.41である。弥生中期と比較すると大きくなるが，平均は下がっている。広溝式では，平地建物が平均0.80，竪穴建物が平均0.44で，竪穴建物の周溝幅が狭くなっている。一方，狭溝式では平地建物の平均が0.19，竪穴建物の平均が0.18である。この差は，周堤構築土の必要土量の差によるものと考えられる。



第7図 北陸弥生後期の周溝をもつ建物2

63・64 宮永.61 古・新，65 宮永.84，70 横江古屋敷.03，92 宿東山.10，93 平面梯川.101，104 三引E.02

下老子笹川遺跡の建物は、周溝柱穴比平均が2.64、周溝周壁比平均が1.6、周溝幅柱穴比平均が0.49で北陸全体の平均値とほぼ同じである。

立地は、広溝式19棟のうち17棟が低地、2棟が高地で低地を中心に築かれる。一方、狭溝式9棟は、5棟が高地、4棟が低地で差は、ほとんど無い。

弥生後期では、広溝式竪穴建物の増加、4本主柱の増加に注目しておきたい。

弥生終末期（第8図、第10図7～9） 弥生終末期は16棟あり、広溝式竪穴建物・広溝式平地建物がそれぞれ5棟、狭溝式竪穴建物・狭溝式平地建物が各3棟に分類され、弥生後期と似た組成となっている。広溝式竪穴建物は、囲繞型4本主柱が3棟、馬蹄型多主柱・囲繞型2本主柱がそれぞれ1棟に細分される。広溝式平地建物は、開口型4本主柱4棟、囲繞型4本主柱1棟に細分される。狭溝式竪穴建物は、囲繞型4本主柱2棟、開口型4本主柱1棟に細分される。狭溝式平地建物は、3棟すべてが開口型多主柱である。

周溝柱穴比は横江古屋敷.502-3（72）の1.77から長池ニシタンボ.01a（96）の3.94の間に分布し、平均は2.85で弥生後期と比較すると柱穴－周溝間が広がっている。周溝柱穴比の広溝と狭溝の平均は、前者が2.94、後者が2.69で弥生後期と比較すると両者とも数値が若干上がるものの大きな差は無い。周溝周壁比は八里向山A.02（106）の1.46から下老子笹川.4（42）の2.03の間に分布し、平均は2.06で周壁－周溝間が広がる。このことは周溝柱穴比でみられた柱穴－周溝間の広がりと同動する。周溝幅柱穴比は横江古屋敷.502-4（73）の0.12から長池ニシタンボ.01a（96）の0.76の間に分布し、平均は0.37である。弥生後期と比較すると、分布域は狭くなり、平均は下がっている。広溝式の平均は0.49で、狭溝式の平均は0.18で弥生後期と変化は無い。しかし、広溝式でみられた平地建物と竪穴建物の差は、前者の平均が0.46、後者の平均が0.52と近い値になっている。下老子笹川遺跡の建物は周溝柱穴比が平均3.25、周溝周壁比が平均1.89、周溝幅柱穴比が平均0.58で、柱穴－周溝間と周溝幅が広い平均値となっている。

立地は、広溝式10棟のうち9棟までが低地で弥生後期と同様である。

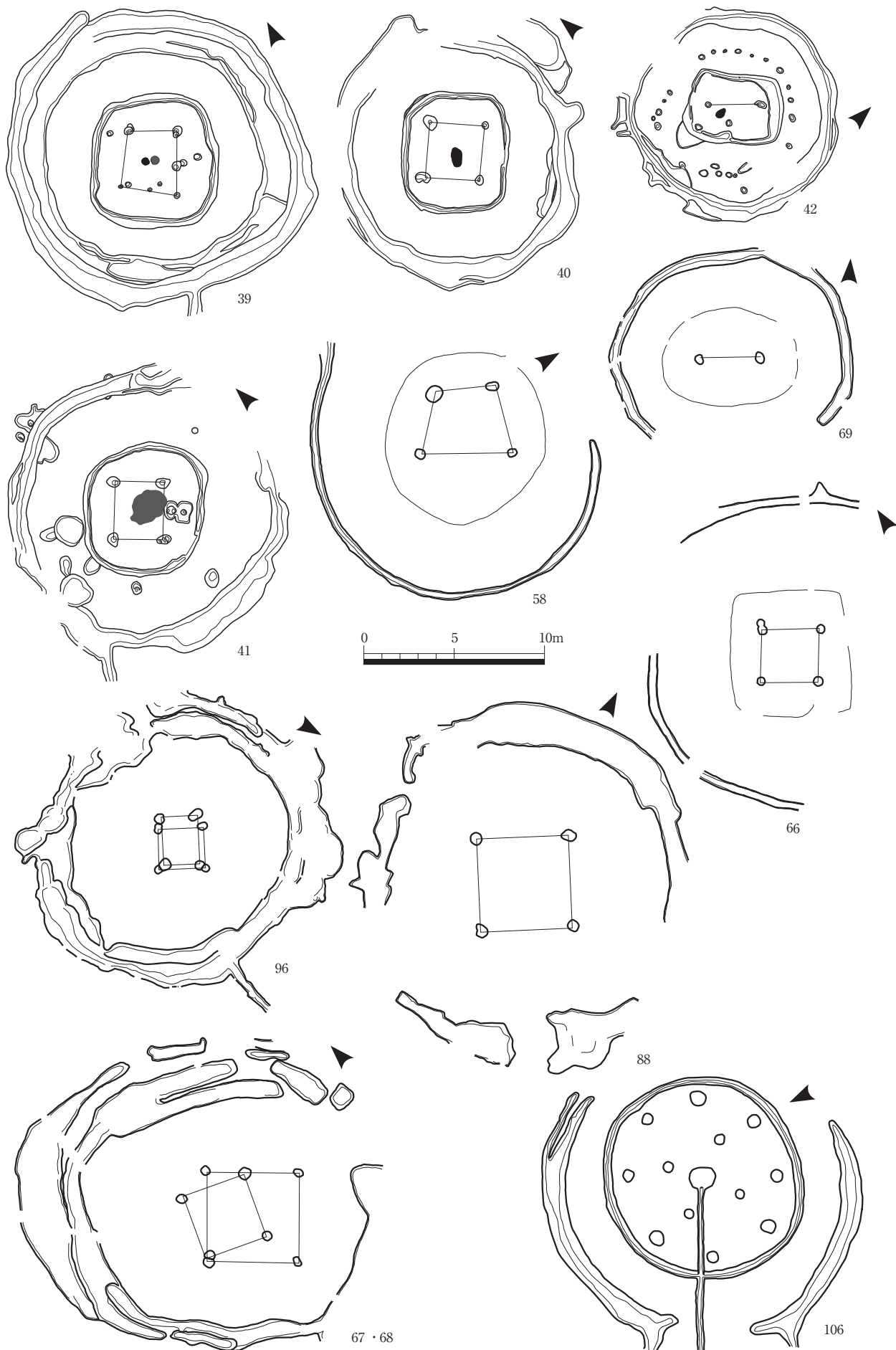
弥生終末期の特徴は4本主柱の割合が激増し、多主柱が激減することである。また狭溝式平地建物がすべて開口型多主柱であることにも注目しておきたい。

古墳期（第9図、第10図10～12） 古墳期は23棟あり、広溝式平地建物14棟、狭溝式竪穴建物5棟、狭溝式平地建物3棟、広溝式竪穴建物1棟に分類され、弥生終末期と比較すると広溝式竪穴建物が激減している。広溝式平地建物は、開口型4本主柱13棟、囲繞型4本主柱1棟に細分される。狭溝式竪穴建物は囲繞型4本主柱3棟、開口型4本主柱2棟に細分される。狭溝式平地建物は開口型4本主柱2棟、馬蹄型多主柱・開口型多主柱各1棟に細分される。

周溝柱穴比は二口かみあれた.9（99）の2.16からの浜竹松B.16（77）の3.94の間に分布し、平均は3.00で、全体的に数値は高くなるが分布域は縮小する。広溝式と狭溝式の平均は、前者が3.09、後者が2.83と全体傾向と同じく差が少なくなっている。周溝周壁比は、旭小学校.39（75）の1.51から浜竹松B.16（77）の2.44の間に分布し、平均1.73で弥生終末期と比べると周堤幅が縮小傾向である。周溝幅柱穴比は、上荒屋.52（84）の0.11から沖町.01（86）の1.47のあいだに分布し、平均0.50で、弥生終末期と比較すると周溝が幅広になる。周溝幅柱穴比は広溝式と狭溝式では、前者が0.68、後者が0.15と弥生終末期と比べると較差が大きくなっている。

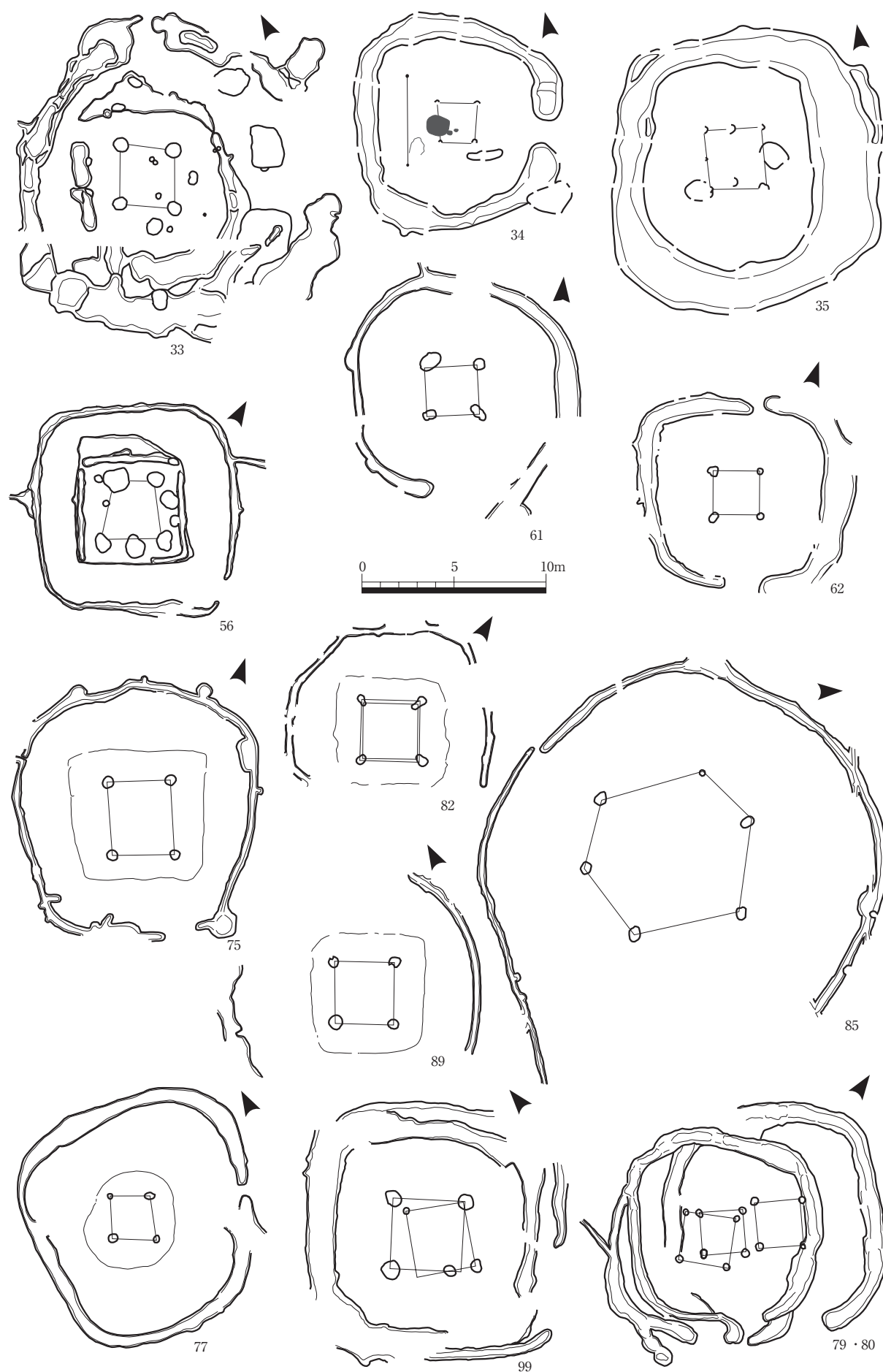
立地は24棟中23棟が低地である。

古墳期の特徴は広溝式平地建物の増加、広溝式竪穴建物の激減である。また広溝式平地建物のほと



第8図 北陸弥生終末期の周溝をもつ建物

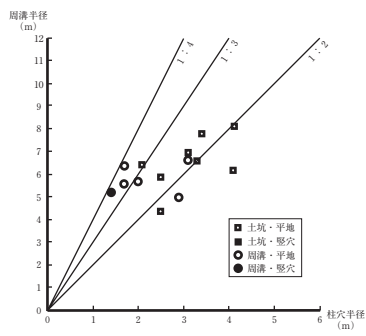
39 下老子笹川.1, 40 下老子笹川.2, 41 下老子笹川.3, 42 下老子笹川.4, 58 万行赤岩山.2,
66 漆町.漆チュウデン1, 67・68 漆町.8・9, 69 横江古屋敷.02, 88 高堂.2-1, 96 長池ニシタンボ.01a,
106 八里向山.A.02



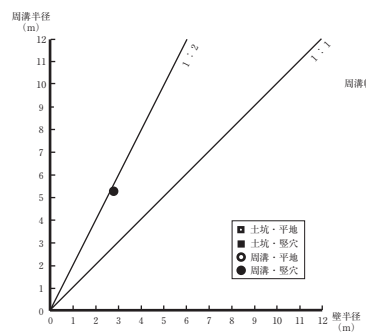
第9図 北陸古墳期の周溝をもつ建物

33 道端.1, 34 西川内南.1, 35 西川内南.2, 56 中谷内.254, 61 新保本町西.1,
62 新保本町西.02, 75 旭小学校.39, 77 浜竹松B.16, 79・80 上荒屋.05・06, 82 上荒屋.53,
85 新保本町東.4, 89 八幡.01, 99 二口かみあれた.9

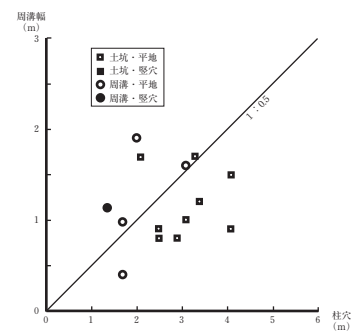
2 周溝をもつ建物の分類と系譜



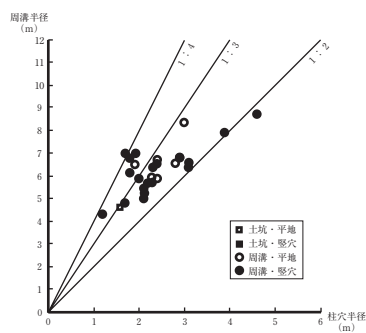
1 北陸弥生中期の周溝半径と柱穴半径



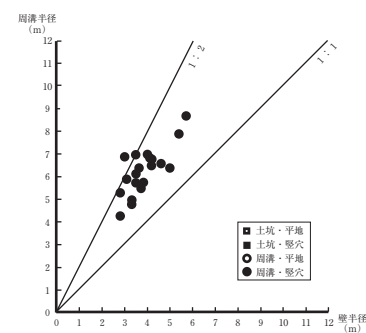
2 北陸弥生中期の壁半径と周溝半径



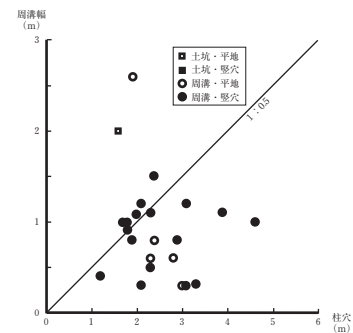
3 北陸弥生中期の周溝幅と柱穴半径



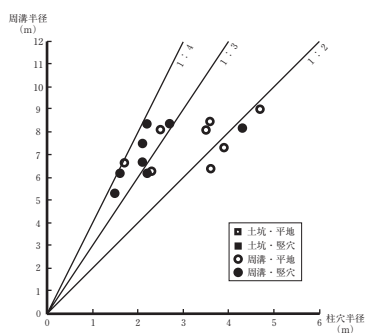
4 北陸弥生後期の周溝半径と柱穴半径



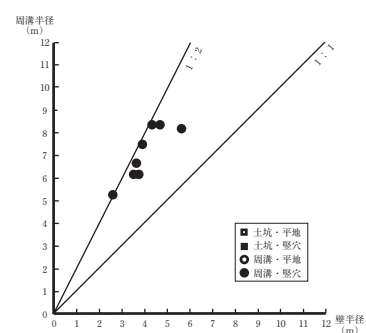
5 北陸弥生後期の壁半径と周溝半径



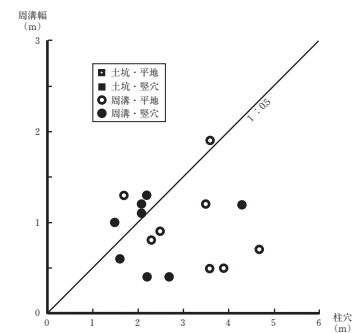
6 北陸弥生後期の周溝幅と柱穴半径



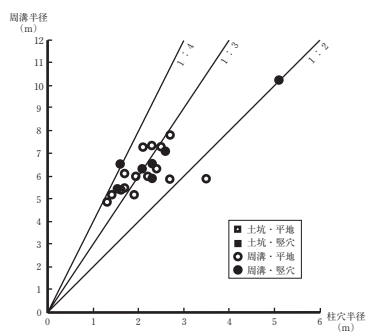
7 北陸弥生終末期の周溝半径と柱穴半径



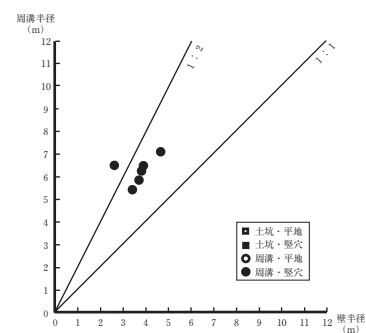
8 北陸弥生終末期の壁半径と周溝半径



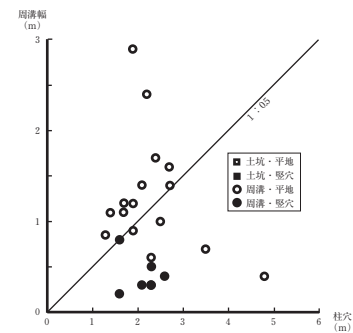
9 北陸弥生終末期の周溝幅と柱穴半径



10 北陸古墳時代の周溝半径と柱穴半径



11 北陸古墳時代の壁半径と周溝半径



12 北陸古墳時代の周溝幅と柱穴半径

第10図 北陸の周溝をもつ建物の周溝法量

んどが開口型4本主柱であることに注目しておきたい。

B 東北（第11図） 東北は3棟のみを検討の対象とする。

弥生後期 弥生後期は屋敷.11（3）で広溝式平地建物土坑4本主柱に分類される。報告^(注113)では壁溝と解釈され、竪穴住居とされているが、ここでは周溝をもつ建物とする。また、この遺構の外側には別遺構とされる「4号周溝状遺構」が同心円状に巡っており、方形周溝墓とされている。この遺構も同時期であることから建物の周溝と解釈したい。遺構内からは北陸系の有段口縁甕が出土しており北陸との関係が注目される。遺跡は低位沖積段丘面上に立地している。周溝柱穴比は2.4で、北陸の平均2.36よりも上回り周壁の位置^(注114)ではなく、周溝の位置であると思われる。周溝幅柱穴比は0.5である。立地は低地である。

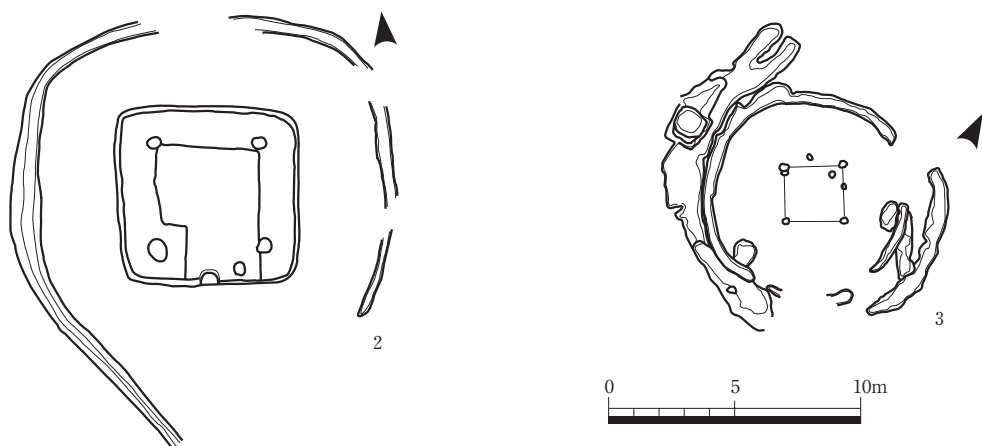
古墳期 古墳期は樋渡台畑遺跡の2棟（1・2）で、いずれも狭溝式竪穴住居馬蹄型4本柱である。周溝柱穴比が3.03と2.65，周溝周壁比が1.75と1.79で，割合は同時期の北陸と変わらないが，法量が大きい。周溝幅柱穴比は0.23と0.24で同時期の北陸平均より大きい（周溝幅が広い）。

立地は河岸段丘上に位置し，高地になる。

C 関東 関東は22棟を対象とする。関東は先述したように，及川良彦氏・飯島義雄氏・石守晃氏らの研究があり，参考にさせて頂いた。

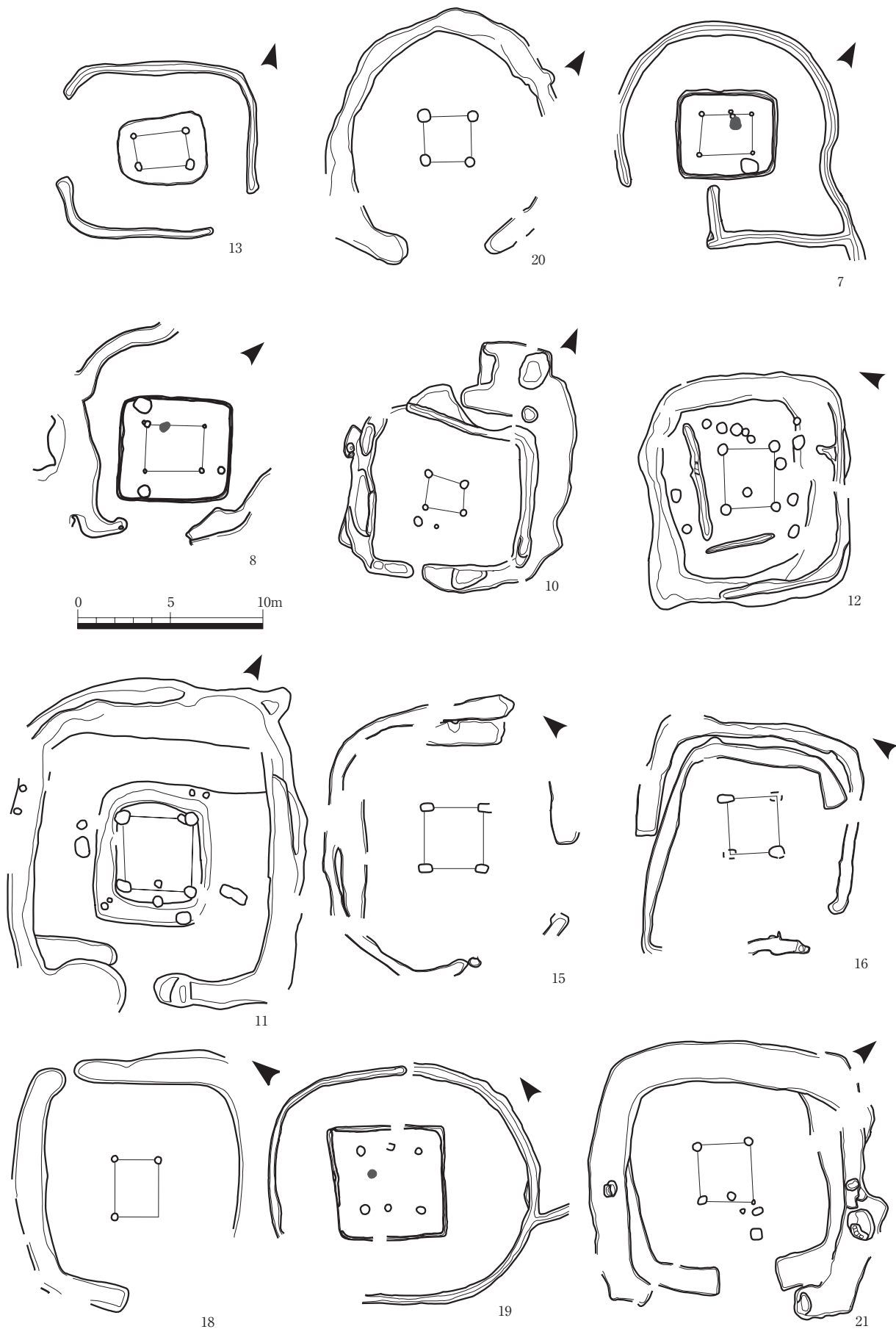
弥生後期（第12図） 弥生後期は，2棟を対象とした。鍛冶谷・新田口.16（13）は狭溝式竪穴建物開口型4本主柱に分類される。報告^(注115)では，方形周溝墓と竪穴建物と別遺構とされていたが，位置関係から周溝をもつ建物にした。周溝柱穴比は3.35，周溝周壁比が2.28，周溝幅柱穴比が0.29で北陸同時期と比較すると，全体的に数値が大きい周溝をもつ建物としては十分である。高砂.002（20）は，広溝式平地建物開口型4本主柱1棟に分類できる。報告^(注116)では周溝と思われるものが「円形周溝墓」とされ，柱穴は近世以降のものとされる。周溝柱穴比，周溝周壁比とも同時期の北陸分布域内に位置している。

古墳期（第12・13図，第14図1～3） 古墳は20棟あり，広溝式平地建物8棟，広溝式竪穴建物6棟，狭溝式竪穴建物4棟，狭溝式平地建物2棟に分類できる。広溝式平地建物8棟はすべて開口型4本主柱である。広溝式竪穴建物は，開口型4本主柱3棟，馬蹄型4本主柱2棟，圍繞型4本主柱1棟に細分される。狭溝式竪穴建物は，開口型4本主柱2棟，圍繞型4本主柱1棟，馬蹄形4本主柱1棟に細分される。狭溝式平地建物2棟はすべて開口型4本主柱である。



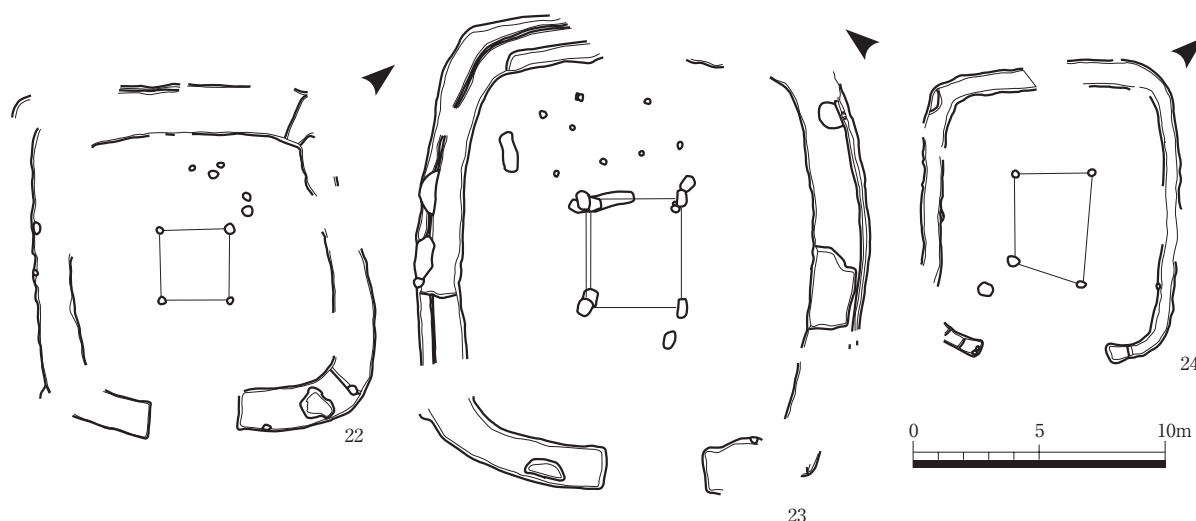
第11図 東北の周溝をもつ建物

2 樋渡台畑.02，3 屋敷.11



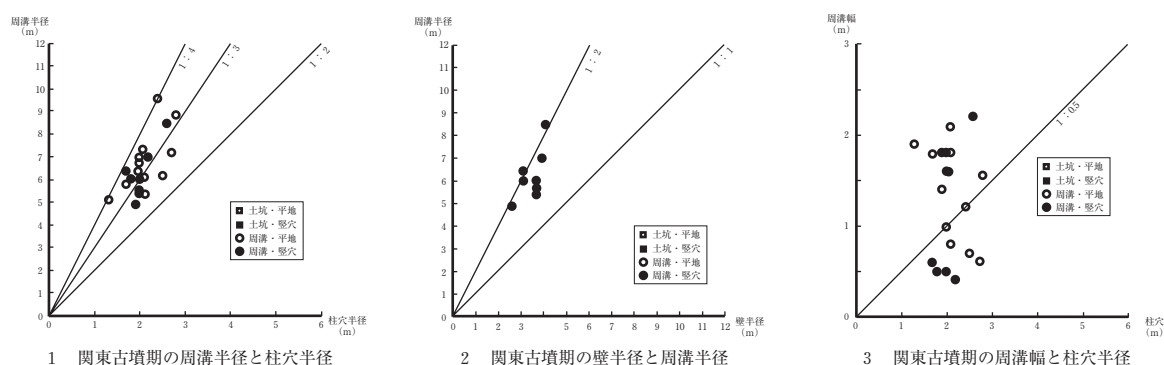
第12図 関東の周溝をもつ建物 1

7 三和工業団地 I.12, 8 横手早稲田.4, 10 横手湯田.1, 11 中内村前.733, 12 中内村前.737,
13 鍛冶谷・新田口.16, 15 小敷田.5, 16 小敷田.9, 18 小沼耕地.3, 19 北島.279, 20 高砂.002,
21 豊島馬場.09



第13図 関東の周溝をもつ建物 2

22 豊島馬場.105, 23 豊島馬場.129, 24 豊島馬場.135



第14図 関東の周溝をもつ建物の周溝法量

周溝柱穴比は豊島馬場.135 (24) の2.48から舟渡.1 (25) の4の間に分布し、平均は3.17で、同時期の北陸平均と比較すると若干数値が大きく、中内村前.733 (11)・豊島馬場.129 (23)・舟渡.1 (25) の法量の大きな1群がある。周溝周壁比は上之手八王子.176 (6) の1.45から中内村前.733 (11) の間に分布し、平均は1.79で、割合が北陸と同じであるが法量のばらつきが大きい。また、広溝式と狭溝式では、前者が平均1.77、後者が平均1.81と近い値となっている。周溝幅柱穴比は、北島.279 (19) の0.18から横手湯田.1 (10) の間に分布し、平均は0.64で、北陸と比較すると周溝幅の割合が大きい。また、広溝と狭溝では前者が平均0.81、後者が平均0.26と大きな差がある。

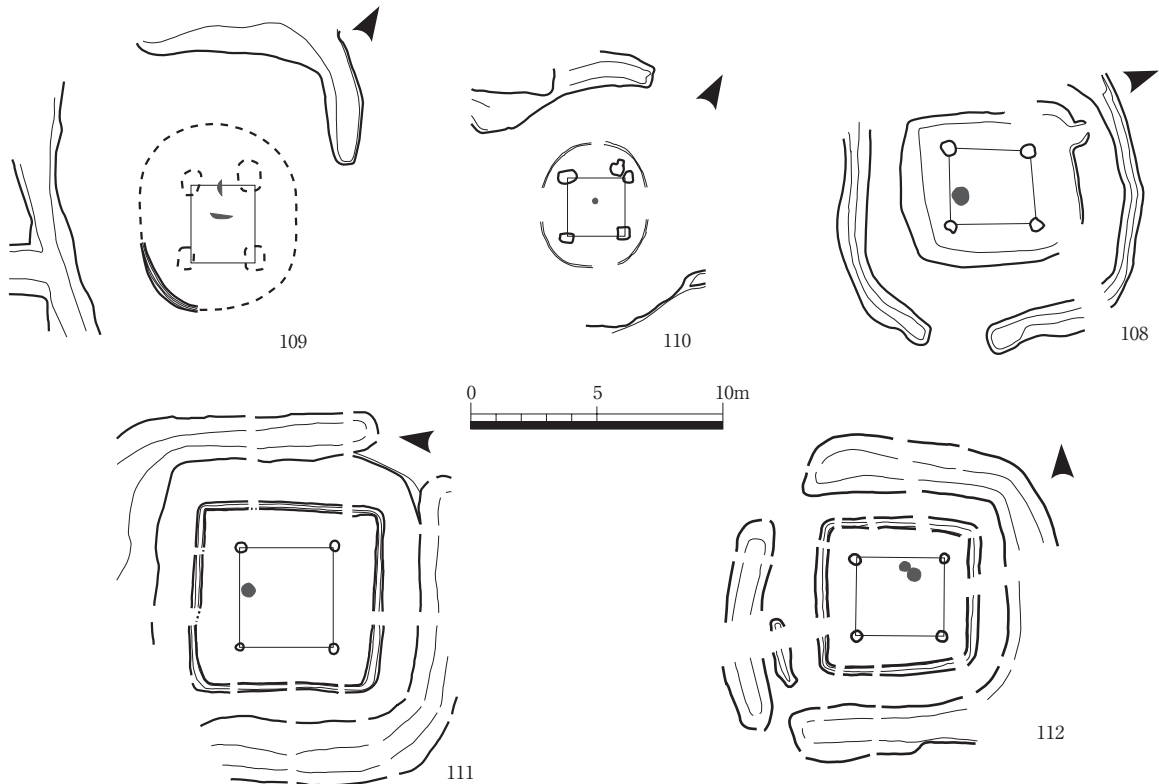
立地は広溝式、狭溝式に関わらずすべて低地である。

古墳の特徴は大部分が開口型4本主柱であることに注目しておきたい。法量を北陸と比較すると、周溝幅が広いものが多い。

D 東海 (第15図) 東海は先述のとおり、松井一明氏らの研究成果があり、8棟を検討対象とする。

弥生後期 弥生後期は登呂遺跡と汐入遺跡、川田・東原田遺跡の5棟があり、広溝式平地建物4棟、広溝式堅穴建物が1棟に分類される。広溝式平地建物は共有型4本主柱が登呂遺跡の2棟、開口型4本主柱2棟に細分される。広溝式堅穴建物は囲繞型4本主柱である。

周溝柱穴比は、登呂.1-48 (109) の2.87から川田・東原田.19 (115) の6.15の間に分布し、平均3.84で、北陸と比較すると数値が大きい。周溝周壁比は、登呂.1-48 (109) の1.97から川田・東原田.19 (115) の2.75の間に分布し、平均2.24である。これも北陸と比較すると数値が大きい。周溝幅柱穴比は汐入.1 (114) の0.64から川田・東原田.19 (115) の1.15の間に分布し、平均0.80である。また、こ



第15図 東海の周溝をもつ建物

108 今宿.01, 109 登呂.1-48, 110 登呂.1-49, 111 川合.2, 112 川合.1

れも北陸と比較すると数値が大きい。

登呂遺跡の広溝式平地建物共有型4本主柱が特徴的である。また、法量的には周溝柱穴比、周溝周壁比、周溝幅柱穴比とも数値が大きい。このことから北陸とは異なる系譜のものと考えられる。

古墳期 古墳期は川合遺跡の2棟と今宿遺跡の1棟の3棟である。3棟すべてが、広溝式堅穴建物開口型4本主柱である。川合.2(111)と川合.1(112)の開口部はコーナーにあり北陸で一般的な1辺の中央が開くタイプの今宿.01(108)とは異なる。また、今宿遺跡からは北陸系土器が出土している。

周溝柱穴比は今宿.01が2.77, 川合.2が2.53, 川合.1が2.43で、北陸の平均値3.09よりも小さい(柱穴－周溝間が狭い)。周溝周壁比は今宿.01が1.69, 川合.2が1.44, 川合.1が1.43で、これも北陸平均値2.44よりも小さい(周壁－周溝間が狭い)。周溝幅柱穴比は、今宿.01が0.40, 川合.2が0.75, 川合.1が0.73である。これは北陸の平均値0.68と比較すると今宿.01が小さく、川合.2と川合.1が大きい。

立地は、2遺跡とも低地である。

北陸と同じ系譜と考えられる今宿遺跡例と異なる系譜の川合遺跡例があるということに注目したい。

E 近畿(第16図) 近畿は、弥生中期2棟、弥生後期1棟、弥生終末期2棟、古墳期2棟の7棟を対象とする。

弥生中期 弥生中期は2棟あり、八雲.1(119)が広溝式堅穴建物土坑型多主柱、瓜生堂.1(118)が狭溝式平地建物開口型4本主柱1棟に分類される。八雲.1は中期前葉に属し、周溝柱穴比2.42, 周溝周壁比1.64で法量的には近いが、土坑が直線的で四隅が途切れる方形周溝墓の様な形態で北陸のものとは異なっている。瓜生堂.1は、中期後葉に属し、周溝柱穴比2.94, 周溝周壁比1.78, 周溝幅柱穴比0.41で北陸の狭溝式平均値0.23と比較すると周溝幅が広い。立地は2棟とも低地である。

弥生後期 弥生後期は、紅茸山.3(117)の狭溝式堅穴建物馬蹄型4本主柱1棟がある。周溝柱穴比3.60, 周溝周壁比1.68, 周溝幅柱穴比0.33である。

弥生終末期 弥生終末期は、下長.2601 (116) の広溝式竪穴建物囲繞型 4 本主柱 1 棟である。周溝柱穴比3.10, 周溝周壁比1.67, 周溝幅柱穴比0.50である。北陸のものと大きな変化は無い。

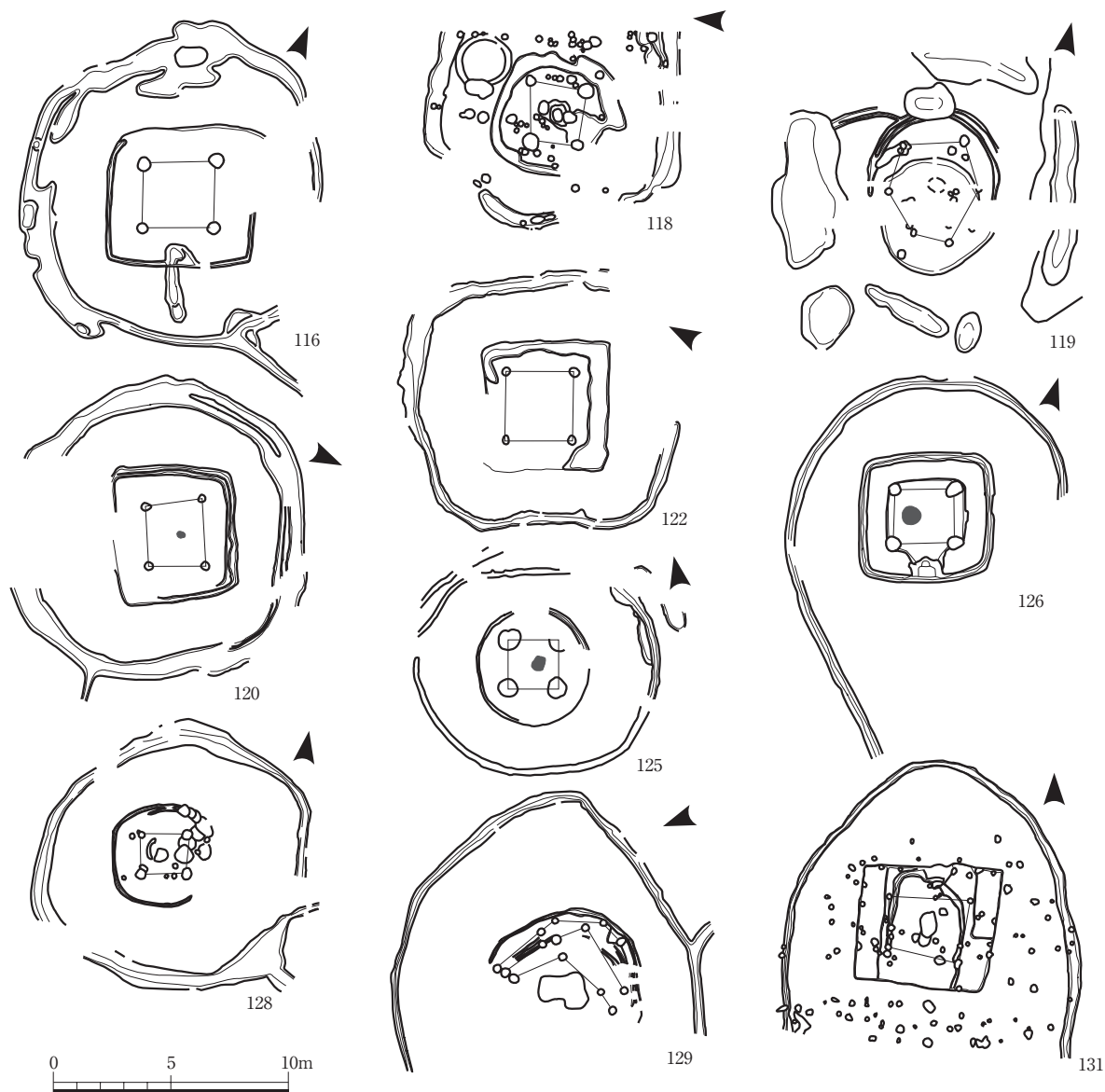
古墳期 古墳期は、尺度遺跡の広溝型竪穴建物囲繞型 4 本主柱, 広溝型竪穴建物開口型 4 本主柱, 狭溝式竪穴建物開口型 4 本主柱が 1 棟ずつである。周溝柱穴比平均3.18, 周溝周壁比1.67, 周溝幅柱穴比0.55で、北陸の平均値と近い。

F 中国・四国 (第16図) 弥生中期から弥生終末期の 8 棟を対象とする。

弥生中期 弥生中期は、矢ノ塚.85000 (128) の狭溝式竪穴建物開口型 4 本主柱が 1 棟あり、後葉に属する。周溝柱穴比は3.92, 周溝周壁比2.21, 周溝幅柱穴比0.53で、ともに北陸の狭溝式の平均値よりも大きい値を示すが、分布域内に収まる。

弥生後期 弥生後期は 6 棟あり、狭溝式竪穴建物は勝負.1 (123)・勝負.2 (124)・百間川原尾島.9 (125)・川津東山田.03 (129)・川津川田東山.07 (130) の 5 棟, 広溝式竪穴建物は百間川原尾島.6 (127) の 1 棟に分類される。狭溝式竪穴建物は馬蹄型 2 棟, 馬蹄形多主柱 1 棟, 開口型 4 本主柱 1 棟, 囲繞型 4 本主柱 1 棟に細分される。

法量は、周溝柱穴比平均が2.89, 周溝周壁比平均が1.87, 周溝幅柱穴比平均が0.26で、北陸の平均



第16図 近畿・中国・四国・九州の周溝をもつ建物

116 下長.2601, 118 瓜生堂.1, 119 八雲.1, 120 尺度.131, 122 尺度.368, 125 百間川尾原島.9, 126 百間川原尾島.5, 128 矢ノ塚.85000, 129 川津東山田.03, 131 団後.1

値と比較すると周溝柱穴比と周溝周壁比は近いが、周溝幅柱穴比が小さい。

弥生終末期 弥生終末期は、百間川原尾島.5 (126) の狭溝式堅穴建物馬蹄型4本主柱1棟がある。周溝柱穴比が3.52, 周溝周壁比1.81, 周溝幅柱穴比0.23で、北陸の狭溝式と近い数値である。

G 九州 (第16図) 九州地方は武田光正氏の論考があるが、2棟を対象とする。

弥生終末期 団後.1 (131), 原田.4-1.2 (132) の2棟とも狭溝式堅穴建物に分類され、馬蹄型4本主柱1棟, 馬蹄型2本主柱に細分される。周溝柱穴比は団後.1が3.00, 原田.4-1.2が3.92である。周溝周壁比は、団後.1が1.14, 原田.4-1.2が1.70である。周溝幅柱穴比は、団後.1が0.19, 原田.4-1.2が0.23である。いずれの法量も、北陸の狭溝式堅穴建物平均値よりも若干大きい。

(6) 周溝をもつ建物の系譜 (第17~20図)

弥生中期 周溝をもつ建物は、北陸・近畿・中・四国でみられる。

北陸では、最も古いものは中期前葉から中葉に位置づけられる下屋敷の広溝式平地建物土坑型多主柱で、環状に土坑が配置された周溝である。中葉・後葉では、広溝式平地建物 (磯部.2など), 広溝式堅穴建物 (千田.02), 狭溝式平地建物 (上荒屋.90) がある。周溝は土坑型, 開口型である。主柱穴は、多主柱, 4本主柱がある。

近畿地方では、最も古い周溝をもつ建物は、近畿弥生中期の八雲.1の広溝式堅穴建物土坑型多主柱で、方形周溝墓状の周溝をもつ。後葉では広溝式堅穴建物開口型4本主柱 (瓜生堂.1) がある。

四国では後葉に属する広溝式堅穴建物開口型4本主柱 (矢ノ塚.8500) が出現する。

弥生後期 周溝をもつ建物は、北陸, 近畿で弥生中期に引き続きあり, 東北, 関東, 東海で出現する。

北陸では広溝式平地建物 (平面梯川.101・江上A.14など), 広溝式堅穴建物 (下老子笹川.7・同.14など), 狭溝式平地建物 (江上B.38など) が中期から引き続きある一方, 狭溝式堅穴建物 (佐伯.042など) が新出する。周溝形状では、土坑型・開口型が中期から引き続きあり, 囲繞型・馬蹄型が新出する。主柱穴では多主柱・4本主柱が引き続きあり, 2本主柱が加わる。4本主柱は増加する。

東北では広溝式平地建物開口型4本主柱 (屋敷.11) が確認され, 周溝をもつ建物が出現する。周溝内から北陸系土器が出土していることから, 北陸からの系譜が考えられる。

関東でも広溝式平地建物 (高砂.002) と狭溝式堅穴建物 (鍛冶谷・新田口.16) が確認され, 今期から周溝をもつ建物が出現する。周溝は2棟とも, 開口型主柱穴は2棟とも4本主柱だが, 高砂.002が求心構造で, 鍛冶谷・新田口.16が対称構造である。

東海では今期から広溝式平地建物 (登呂.1-48など), 広溝式堅穴 (川田・東原田.19) があり, 周溝をもつ建物が出現し, 多く見られる。周溝は共有型, 開口型である。主柱穴は4本主柱で対称構造である。

近畿では狭溝式堅穴建物馬蹄型4本主柱 (紅茸山.3など) がある。

中国・四国では、狭溝式堅穴建物 (百間川原尾島.9, 川津東山田.03) があり, 今期から周溝をもつ建物が出現する。周溝は囲繞型, 馬蹄型である。主柱穴は4本主柱, 多主柱がある。

弥生終末期 北陸では, 広溝式平地建物 (高堂.2-1・長池ニシタンボ.01など), 広溝式堅穴建物 (下老子笹川.1など), 狭溝式堅穴建物 (横江古屋敷.02・漆町・漆チュウデン1など) がある。周溝は後期までみられた土坑型が消滅するようである。主柱穴では, 後期でみられた多主柱が減る一方, 4本主柱が主になり, 2本主柱も多くなるようである。堅穴建物でも同じ主柱穴の状況で, 連動していると思われる。

近畿では, 広溝式堅穴建物 (下長.2601) がある。

中国・四国では狭溝式竪穴建物（百間川原尾島.5）がみられる。

九州で、狭溝式竪穴建物馬蹄型（団後.1など）がみられる。

東北・関東・東海では良好な例を提示できず、北陸では依然として多く周溝をもつ建物が造られるが、他地域では周溝をもつ建物は一般的ではないようである。

古墳期 北陸では依然として広溝式平地建物（上荒屋.05・西川内南.2など）、狭溝式平地建物（新保本町東.4）、狭溝式竪穴建物（旭小学校.39・中谷内.254など）は多いが、広溝式竪穴建物（浜竹松B.16）は数少ない例で、激減するものと思われる。

東北では狭溝式竪穴建物馬蹄型4本主柱（樋渡台畑.02など）がある。

関東では広溝式平地建物開口型4本主柱（豊島馬場.105など）が多く、盛行する。これらは、周溝幅・周堤が北陸のものよりも広く、北陸とは異なる型式変化の方向を辿ったものと考えられる。

東海では北陸で減少する広溝式竪穴建物開口型4本主柱が依然として存在する（川合.111など）。今宿.01は法量の比較、北陸系土器の出土から、北陸の広溝式竪穴建物と同一系譜と考えられる。

近畿でも広溝式竪穴建物（尺度.131など）がみられ、東海と同様な状況である。

中国・四国・九州では良好な類例が提示できない。

次に、系譜について考えてみる。筆者は、前拙稿^(注17)で、北陸においては共通の主柱穴配置である周溝をもつ建物と関連が深い竪穴建物の比較検討から、周溝をもつ平地式建物の周壁位置が柱穴半径の2倍（周溝柱穴比が2）であることと、周溝がこの位置より外側の3倍になることを示した。本稿では北陸以外の周溝をもつ建物も同様の配置がされていることがわかった。すなわち、主柱穴、周壁、周溝の配置が北陸以外のすべての周溝をもつ建物でも当てはまり、系譜ではなく、共通の上屋構造を構築するための必須条件であったと言える。この必須条件は弥生文化の中に存在する技術で、竪穴建物が建設できない環境（立地・気候）において用いられ周溝をもつ建物が築かれたと考えられる。広溝式の周溝をもつ建物の北陸と近畿の最古のものを比較すると、周溝形態が大きく異なる。時期差があるため同一系譜の可能性も否定出来ないが、地域差（形式差）が大きく別の系譜と考える。その後、北陸は中葉から後葉にかけて周溝をもつ建物が数多く造られ、主流の住居形式として定着するが、近畿では主流にはならないようである。同一の系譜と考えられるのは、建物法量と北陸系土器の出土状況とを併せて考えれば、東北や関東、東海の一部（岐阜県など）は北陸からの系譜と考えられる。このうち関東は、弥生後期に広溝式の周溝をもつ建物が出現するが、独自の型式変化を経て古墳期になって積極的に採用し、盛行したと考えたい。近畿・東海・中国・四国・九州は低地の住居において積極的には採用せず、周溝をもつ建物（特に広溝式）が普及するには至らなかったと思われる。北陸において広溝式の周溝をもつ建物が盛行した要因として、低地に竪穴住居（建物）もしくは同様の上部構造をもった建物を築く必要性があったからと思われる。

一方、狭溝式の周溝をもつ建物は、高地の例も多く、排水機能を主としたもので、特に地域性は認められない。

（7）今後の課題

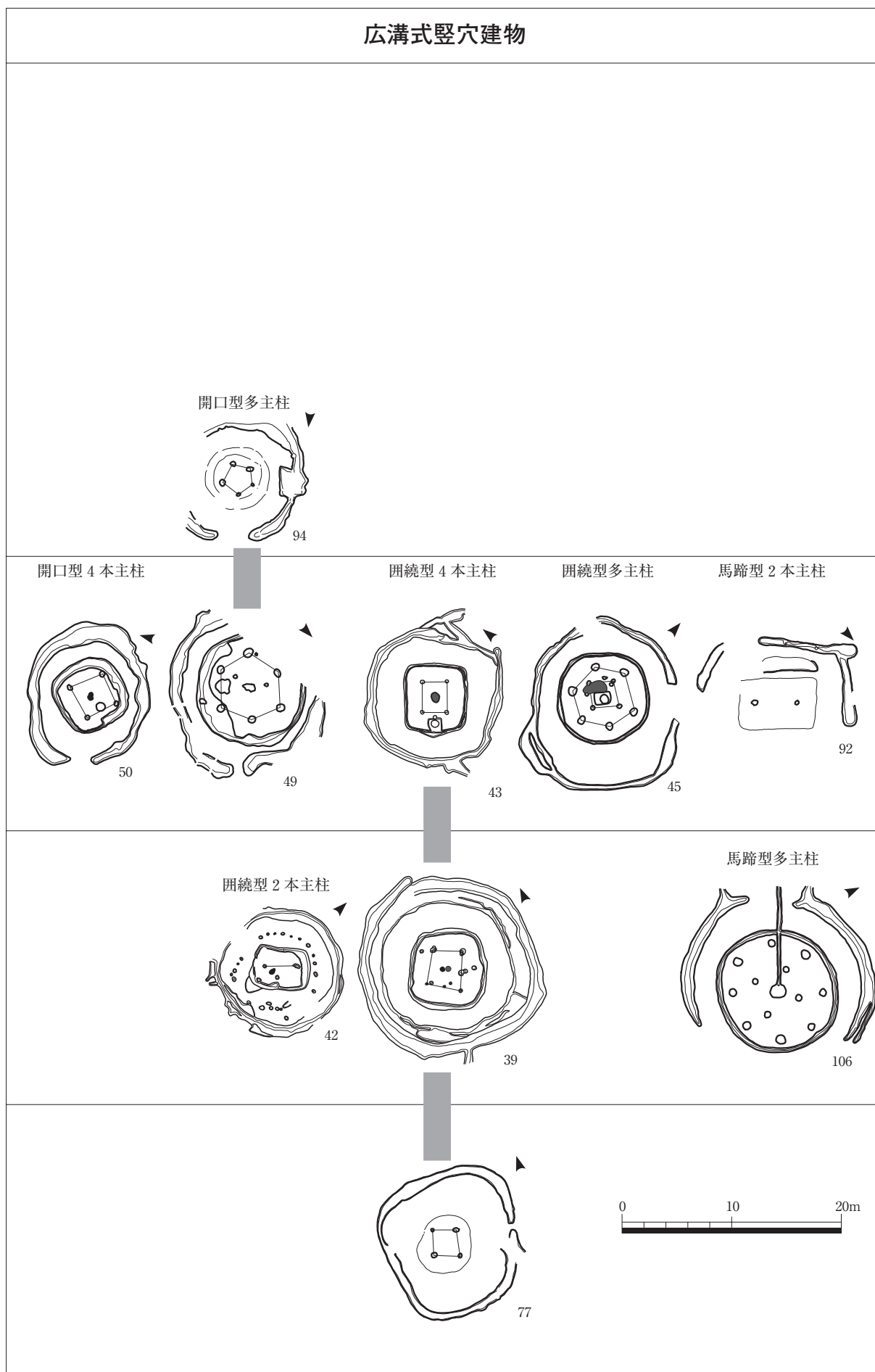
前項まで周溝をもつ建物について比較検討し、近畿・東海以西は北陸とは別系譜、東北・関東・東海の建物は北陸からの系譜と考えた。関東では今回対象としなかった柱穴を内部に伴わない周溝も周溝をもつ建物であるとする説もある。本稿では取り上げなかったものの、これらの遺構が北陸と同じ構造の周溝をもつ建物であるかは、今後の課題の一つとしたい。また、北陸において周溝をもつ建物は竪穴建物との関連が深く、竪穴建物の変遷も今後の課題である。

	広溝式平地建物	
弥生中期	土坑型多主柱 107	
	開口型4本主柱 26 71	
弥生後期	93 37	開口型多主柱 104 囲繞型多主柱 70
弥生終末期	88	囲繞型4本主柱 96
古墳期	79・80	35

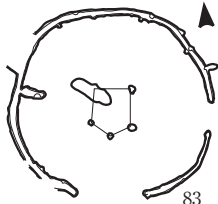
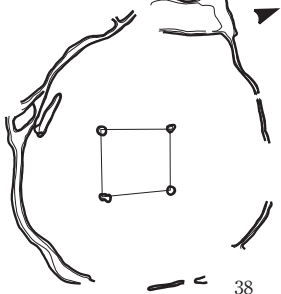
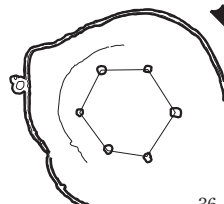
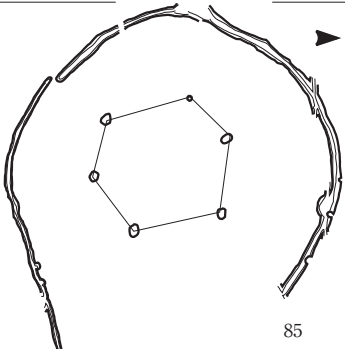
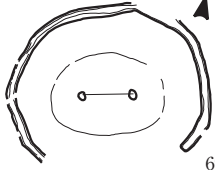
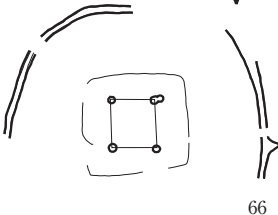
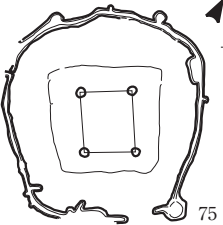
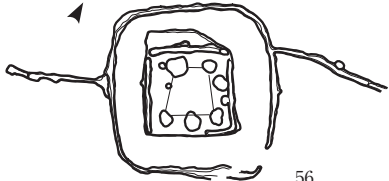
第17図 北陸の周溝をもつ建物の変遷(1)

26 磯部2, 35 西川内南2, 37 江上A.14, 70 横江古屋敷.03, 71 横江古屋敷.04, 79・80 上荒屋.05・06, 88 高堂2-1, 93 平面梯川.101, 96 長池ニシタンボ.01a, 104 三引E.02, 107 下屋敷

広溝式竪穴建物



39 下老子笹川.1, 42 下老子笹川.4, 43 下老子笹川.7, 45 下老子笹川.10新, 49 下老子笹川.13, 50 下老子笹川.14, 77 浜竹松B.16, 92 宿東山.10, 94 千田.02, 106 八里向山A.02

	狭溝式平地建物	狭溝式竪穴建物
弥生中期	<p>開口型多主柱</p>  <p>83</p>	
弥生後期	<p>開口型4本主柱</p>  <p>38</p>	<p>囲繞型多主柱</p>  <p>36</p>
弥生終末期	<p>馬蹄型多主柱</p>  <p>85</p>	<p>開口型2本主柱</p>  <p>69</p> <p>馬蹄型4本主柱</p>  <p>66</p> <p>囲繞型4本主柱</p>  <p>75</p>  <p>56</p>
古墳期		

第18図 北陸の周溝をもつ建物の変遷(2)

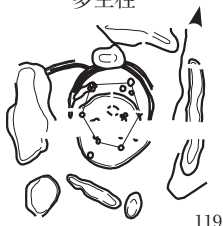
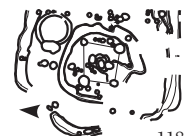
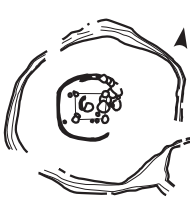
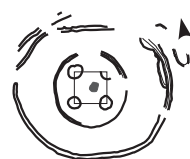
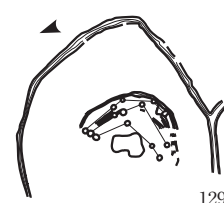
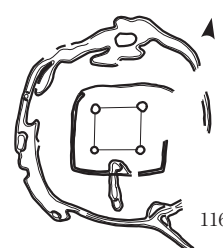
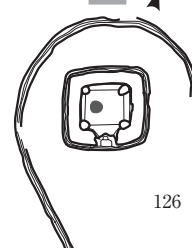
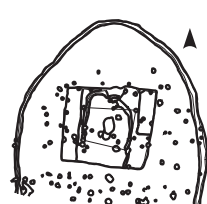
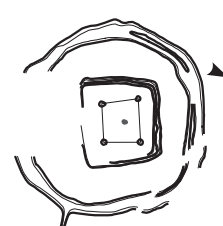

36 佐伯.042, 38 江上B.111, 56 中谷内.254, 66 漆町.漆チュウデン1, 69 横江古屋敷.02, 75 旭小学校.39, 83 上荒屋.90, 85 新保本町東.4

	東北	関東			東海
弥生後期	広溝式平地建物 開口型 4 本柱 3	広溝式平地建物 開口型 4 本柱 20	広溝式竪穴建物	狭溝式竪穴建物 開口型 4 本柱 13	広溝式平地建物 共有型 4 本柱 109
弥生終末期					
古墳時代	狭溝式竪穴建物 馬蹄型 4 本柱 1				広溝式竪穴建物 開口型 4 本柱 108
				開口型 4 本柱 11 開口型 4 本柱 19 馬蹄型 4 本柱 7	開口型 4 本柱 111



第19図 東北・関東・東海の周溝をもつ建物の変遷

2 樋渡台畑.02, 3 屋敷.11, 7 三和工業団地 I.12, 11 中内村前.733, 13 鍛冶谷・新田口.16, 19 北島.279, 20 高砂.002, 22 豊島馬場.105, 108 今宿.01, 109 登呂.1-48, 111 川合.2

	近畿	中国・四国	九州
弥生中期	<p>土坑式竪穴建物 多主柱</p>  <p>119</p> <p>広溝式竪穴建物 開口型4本主柱</p>  <p>118</p>	<p>広溝式竪穴建物 開口型4本主柱</p>  <p>128</p>	
弥生後期		<p>狭溝式竪穴建物 囲繞型4本主柱 馬蹄型多主柱</p>  <p>125</p>  <p>129</p>	
弥生終末期	<p>囲繞型4本主柱</p>  <p>116</p>	 <p>126</p>	<p>狭溝式竪穴建物 馬蹄型4本主柱</p>  <p>131</p>
古墳時代	 <p>120</p>		

第20図 近畿・中国・四国・九州の周溝をもつ建物の変遷

116 下長.2601, 118 瓜生堂.1, 119 八雲.1, 120 尺度.131, 125 百間川尾原島.9,
126 百間川原尾島.5, 128 矢ノ塚.85000, 129 川津東山田.03, 131 団後.1

以上、多くの課題は残り不十分な点も多いが本拙稿をもって下老子笹川遺跡の考察の一文としたい。

謝辞

拙稿を草するにあたり、調査時から現在に至るまで浅川滋男、石川日出志、岡田一広、及川良彦、樫田 誠、斎藤 隆、篠原和大、下濱貴子、櫛宜田佳男、浜崎悟司、橋本正春、林 大智、久田正弘、宮本長二郎、安中哲徳、安 英樹の各氏及び同事務所所員には有益なご教示、ご指導、ご協力を得た。

以上の方々に感謝し、末筆ながらここに記して厚く御礼申し上げます。（岡本淳一郎）

注

- 注1 石塚遺跡の報告は次の2点がある。上坂成次・上野 章、「高岡市石塚遺跡発掘調査概報」『オジャラ』3、富山県立高岡工業高等学校地理歴史クラブO・B会、1968年。上野 章、「30 石塚遺跡」『富山県史』考古編 富山県、1972年。
- 注2 宮本哲郎、『金沢市寺中遺跡―第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査報告書』（『金沢市文化財紀要』11）、金沢市教育委員会、1977年。
- 注3 高橋 保・他、『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書下谷地遺跡』（『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第19）、新潟県教育委員会、1979年。
- 注4 樫田 誠、『第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書』小松市教育委員会、1987年。
- 注5 楠 正勝、「2.周溝を有する建物」『金沢市西念・南新保遺跡』Ⅱ（『金沢市文化財紀要』77）、金沢市・金沢市教育委員会、1989年。
- 注6 栃木英道、「「周溝を有する建物」について」『拓影』31、石川県立埋蔵文化財センター、1990年。
- 注7 田嶋明人、「北陸の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』、埋蔵文化財研究会、1991年。
- 注8 南 久和、「第1節溝について」『金沢市新保町東遺跡』（『金沢市文化財紀要』85）、金沢市教育委員会、1991年。
- 注9 久田正弘、「北陸地方西部における弥生時代の地域性について」『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報3 平成3年度』、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会、1992年。
- 注10 浜崎悟司、「加賀における集落構成要素・加賀の集落構造の推移」『日本考古学協会1993年度新潟大会 シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』、日本考古学協会新潟大会実行委員会、1993年。
- 注11 栃木英道、『周壁盛土式・堅穴系・建物について』（第3回村落遺跡研究会資料）、1994年。
- 注12 岡本淳一郎、「“周溝をもつ建物”について」『埋蔵文化財調査概要―平成8年度―』、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、1997年。
- 注13 岡本淳一郎、「「周溝をもつ建物」についての基礎的研究」『富山大学考古学研究室論集 蜃気楼―秋山進午先生古稀記念―』、六一書房、2003年。
- 注14 出越茂和、「①平地式・堅穴式建物」『石川県金沢市 上荒屋遺跡Ⅰ 第2分冊 古墳時代編』（『金沢市文化財紀要』120-1）、金沢市教育委員会、1995年。
- 注15 久保有希子、「第1節 周溝を有する建物について」『石川県金沢市 上荒屋遺跡Ⅰ 第1分冊 弥生時代編』（『金沢市文化財紀要』120-1）、金沢市教育委員会、1995年。
- 注16 及川良彦氏の周溝をもつ建物に関する論文は次のものなどがある。「関東地方の低地遺跡の再検討―弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に―」『青山考古』第15号、青山考古学会、1998年。「関東地方の低地遺跡の再検討（2）―「周溝を有する建物跡」と方形周溝墓および今後の集落研究への展望―」『青山考古』第16号、青山考古学会、1999年。「関東地方の低地遺跡の検討（5）―墓と住居の誤謬―」『宇津木向原遺跡発掘40周年記念「方形周溝墓研究の今」Ⅱ』、方形周溝墓シンポジウム実行委員会、2004年。
- 注17 飯島義雄氏の周溝をもつ建物に関する論文には次のものなどがある。「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号、群馬県立歴史博物館、1998年。「所謂「三和工業団地Ⅰ遺跡型」の「周溝をもつ建物」の構造」『研究紀要』22財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、2004年。「「周溝をもつ建物」における掘り方の確認の意義―前橋台地上に立地する横手早稲田遺跡における例を中心として―」『群馬県考古学手帳』第15号、群馬土器観会、2005年。
- 注18 長瀬 出、「東京都豊島馬場遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『法政考古学』第26集、法政考古学会、2000年。
- 注19 駒見佳容子、「北陸と関東―弥生時代後期から古墳時代前期の周溝を有する住居の比較―」『富山市日本海文化研究所報』、第28号、富山市日本海文化研究所、2002年。
- 注20 石守 晃、「周溝をもつ建物」『中内村前遺跡』（2）（『（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書』、第322集）、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、2003年。
- 注21 岡村 渉、『特別史跡 登呂遺跡 発掘調査報告書』Ⅱ（『静岡市埋蔵文化財調査報告』57）、静岡市教育委員会、2001年。岡村 渉、『特別史跡 登呂遺跡 発掘調査報告書』Ⅲ（『静岡市埋蔵文化財調査報告』60）、静岡市教育委員会、2002年。
- 注22 松井一明、「堅穴住居と掘立柱建物―静岡県下における低地集落の建物構造と集落イメージ―」『静岡県における弥生時代集

2 周溝をもつ建物の分類と系譜

落の変遷 2001年度静岡県考古学会シンポジウム資料集』, 静岡県考古学会, 2002年。

注23 森田克行, 「すまいと生産活動」『季刊考古学』, 第32号, 雄山閣出版, 1990年。

注24 近藤 広, 「平地式建物をもつ弥生集落—近江の例を中心に」『滋賀考古』, 第21号, 滋賀考古学研究会, 1999年。

注25 武田光正, 「堅穴部外の施設について」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—52—甘木市所在宮原遺跡V』, 福岡県教育委員会, 1998年。

注26 宮本長二郎, 『日本原始古代の住居建築』, 中央公論美術出版, 1986年。宮本長二郎, 「平地住居と堅穴住居の類型と変遷」『先史日本の住居とその周辺』, 同成社, 1998年。

注27 岡本淳一郎, 「越中の住居と集落」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム4 シンポジウム『邪馬台国時代の越と大和』資料集』, 香芝市教育委員会, 2004年。

注28 注12・13・27など。

注29 都出比呂志, 1985, 「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』, 大阪大学文学部 (『日本農耕社会の成立過程』1989所収)。

注30 円形の場合はAx地点の延長線との交点とした。

注31 例えば, 支柱穴が5本の場合は柱穴中心がそれぞれA1, A2, A3, A4, A5となる。

注32 吉田博行他, 『福島県営会津南部ほ場整備事業 若宮地区遺跡発掘調査報告書 樋渡台畑遺跡』(『会津坂下町文化財調査報告書』第17集), 会津坂下町教育委員会, 1990年。

注33 小野田義和, 『東北横断自動車道遺跡調査報告12 屋敷遺跡』(『福島県文化財調査報告書』第262集), 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団, 1991年。

注34 報告書を実見しておらず, 飯島義雄「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 群馬県立歴史博物館, 1998年による。

注35 坂口 一他, 『三和工業団地I遺跡(2)—縄文・古墳・奈良・平安時代他編—』(『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告』第251集), 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団他, 1999年。

注36 斉藤利昭, 『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』(『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告』第280集), 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団, 2001年。

注37 春山秀幸他, 『横手南川端遺跡・横手湯田遺跡』(『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告』第292集), 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団他, 2002年。

注38 石守 晃, 『中内村前遺跡』(2) (『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書』第322集), 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 2003年。

注39 西口正純他, 『鍛冶谷・新田口遺跡』(『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第62集), 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1986年。

注40 報告書を実見しておらず, 及川良彦「関東地方の低地遺跡の再検討(2)—「周溝を有する建物跡」と方形周溝墓および今後の集落研究への展望—」『青山考古』第16号 青山考古学会1999年を参考とした。

注41 吉田 稔他, 『小敷田遺跡』(『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第95集), 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1991年。

注42 田中正夫他, 『小沼耕地遺跡』(『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第100集), 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1991年。

注43 山本 靖他, 『北島遺跡』X (『埼玉県埋蔵文化財調査報告書』第302集), 埼玉県・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 2005年。

注44 小高幸男, 『高砂遺跡』II (『財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第154集), 財団法人君津郡市文化財センター他, 1999年。

注45 嶋村一志他, 『豊島馬場遺跡』II (『北区埋蔵文化財調査報告』第25集), 東京都北区教育委員会, 1999年。

注46 前掲注40と同じ。

注47 高橋 保他, 『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書下谷内遺跡』(『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第19), 新潟県教育委員会, 1979年。

注48 前川雅夫, 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘報告書Ⅶ 道端遺跡Ⅲ』(『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第142集), 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 2005年。

注49 伊藤正志他, 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘報告書X 西川内北遺跡・西川内南遺跡』(『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第146集), 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 2005年。

注50 山本正敏他, 『富山県魚津市 佐伯遺跡発掘調査概要』, 富山県教育委員会, 1979年。

注51 久々忠義, 「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町遺構編—』, 上市町教育委員会, 1981年。

- 注52 宮田進一，「江上B遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町遺構編―』，上市町教育委員会，1981年。
- 注53 本書。
- 注54 稲垣尚美，『HS-04遺跡発掘調査報告 二級河川下条川広域基幹改修事業（タートルランド建設）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』，小杉町教育委員会，1999年。
- 注55 高梨清志・越前慶祐，『富山県舟橋村 浦田遺跡発掘調査報告』（3），舟橋村教育委員会，2000年。
- 注56 青山 晃他，「中谷内遺跡」『埋蔵文化財調査概要―平成16年度―』，財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所，2005年。
- 注57 平田天秋・西野秀和他，『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡 県道能登島和倉線改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告』，石川県立埋蔵文化財センター，1982年。
- 注58 土肥富士夫他，『万行赤岩山遺跡―宅地開発に係る緊急発掘調査報告書―』，七尾市教育委員会，1983年。
- 注59 楠 正勝他，『金沢市西念・南新保遺跡 II』（『金沢市文化財紀要』77），金沢市・金沢市教育委員会，1989年。
- 注60 楠 正勝他，『金沢市西念・南新保遺跡 IV』（『金沢市文化財紀要』119），金沢市・金沢市教育委員会，1996年。
- 注61 楠 正勝，『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡、近岡カンタンボ遺跡』（『金沢市文化財紀要』54）金沢市教育委員会，1985年。
- 注62 楠 正勝，『金沢市新保本町西遺跡Ⅲ―賃貸住宅建設に伴う発掘調査報告―』（『金沢市文化財紀要』97），金沢市教育委員会 1992年。
- 注63 前田清彦，『旭遺跡群Ⅲ 松任市旭工業団地中央地区造成に係る宮永遺跡発掘調査報告書』，松任市教育委員会，1995年。
- 注64 田嶋明人，『漆町遺跡』，I 石川県立埋蔵文化財センター，1986年。
- 注65 樫田 誠，『第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書』，小松市教育委員会，1987年。
- 注66 高橋由知，『松任市横江古屋敷遺跡 I』，松任市教育委員会，1993年。
- 注67 金山弘明，『松任市横江古屋敷遺跡Ⅱ―新横江産業団地造成事業（濃飛西濃運輸地区）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書―』，松任市教育委員会，1995年。
- 注68 木田 清，『松任市旭小学校遺跡』松任市教育委員会，1990年。
- 注69 木田 清・前田清彦・沢辺利明，『松任市八田小鮎遺跡』松任市教育委員会，1988年。
- 注70 前田清彦，『松任市浜竹松B（竹松北）遺跡』松任市教育委員会，1993年。
- 注71 増山 仁，『金沢市磯部運動公園遺跡』（『金沢市文化財紀要』70），金沢市教育委員会，1988年。
- 注72 出越茂和他，『石川県金沢市上荒屋遺跡 I 第2分冊古墳時代編』（『金沢市文化財紀要120―2』），金沢市教育委員会，1995年。
- 注73 小西昌志他，『石川県金沢市上荒屋遺跡 I 第1分冊弥生時代編』（『金沢市文化財紀要』120―1），金沢市教育委員会，1995年。
- 注74 南 久和，『金沢市新保本町東遺跡』（『金沢市文化財紀要』85），金沢市教育委員会他，1991年。
- 注75 南 久和，『金沢市沖町遺跡』（『金沢市文化財紀要』98），金沢市教育委員会他，1992年。
- 注76 木立雅朗・平田天秋他『藤橋遺跡』，石川県立埋蔵文化財センター，1992年。
- 注77 栃木英道他，『小松市高堂遺跡 一般国道8号改築事業（金沢西バイパス）関係埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』，石川県立埋蔵文化財センター，1990年。
- 注78 浜崎悟司他，『石川県小松市 八幡遺跡 I ―一般国道8号小松バイパス改築工事関係埋蔵文化財調査報告書―』，（社）石川県埋蔵文化財保存協会，1998年。
- 注79 北野博司他，『宿東山遺跡 一般国道159押水バイパス改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』，石川県立埋蔵文化財センター，1987年。
- 注80 垣内光次郎・川畑 誠・布尾幸恵他，『小松市平面梯川遺跡 第2・3次発掘調査報告書』，（財）石川県埋蔵文化財センター，2000年。
- 注81 小西昌志，『千田遺跡』（『金沢市文化財紀要』181），金沢市（金沢市埋蔵文化財センター），2002年。
- 注82 中屋克彦他，『金沢市戸水B遺跡 金沢西部地区土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書』，石川県立埋蔵文化財センター，1994年。
- 注83 吉田 淳，『長池・二日市・御経塚遺跡群』，野々市町教育委員会，1998年。
- 注84 藤田邦雄他，『藤井サンジョガリ遺跡・高島テラダ遺跡・高島カンジタ遺跡』，社団法人石川県埋蔵文化財保存協会，1994年。
- 注85 上野 敬・北野博司他，『二口かみあれた遺跡』，志雄町教育委員会，1995年。
- 注86 上野 敬・土上ひろみ・前多美雪，『二口かみあれた遺跡第2次』，志雄町教育委員会，1999年。
- 注87 久田正広他，『田鶴浜町三引E遺跡・三引F遺跡』（『一般国道470号線（能越自動車道）改良工事及び主要地方道米見田鶴浜線建設工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』（V）），（財）石川県埋蔵文化財センター，2001年。

2 周溝をもつ建物の分類と系譜

- 注88 藤田邦雄他,「梅田B遺跡(第4次)」『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報』8, 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会, 1997年。
- 注89 下濱貴子他,『八里向山遺跡群』, 小松市教育委員会, 2004年
- 注90 富山正明・山口充・天井和峰,『下屋敷遺跡、堀江十楽遺跡』, 福井県教育庁埋蔵文化財センター, 1988年。
- 注91 春日井 恒他,『今宿遺跡』(『岐阜県文化財保護センター調査報告書』第37集), 財団法人岐阜県文化財保護センター他, 1998年。
- 注92 岡村 渉,『特別史跡 登呂遺跡 発掘調査報告書』Ⅱ (『静岡市埋蔵文化財調査報告』57), 静岡市教育委員会, 2001年。
- 注93 岡村 渉,『特別史跡 登呂遺跡 発掘調査報告書』Ⅲ (『静岡市埋蔵文化財調査報告』60), 静岡市教育委員会, 2002年。
- 注94 山田成洋他,『川合遺跡』(遺構編) (『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告』第25集), 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1990年。
- 注95 報告書を実見しておらず, 岡村 渉,『汐入遺跡第6次発掘調査報告書』 静岡市教育委員会, 2004年, 浅野 毅「汐入遺跡」『静岡県における弥生時代集落の変遷 2001年度静岡県考古学会シンポジウム資料集』, 静岡県考古学会, 2002年を参考とした。
- 注96 井村広巳,「川田・東原田遺跡」『静岡県における弥生時代集落の変遷 2001年度静岡県考古学会シンポジウム資料集』, 静岡県考古学会, 2002年。
- 注97 岩崎 茂・小島睦夫,『下長遺跡発掘調査報告書』Ⅲ (『守山市文化財調査報告書』第50冊), 守山市教育委員会, 1993年。
- 注98 原口正三他,『高槻市史』第6巻 考古編, 高槻市役所, 1973年。
- 注99 瀬川 健・小野久隆・村上富喜子他,『瓜生堂』, 財団法人大阪文化財センター, 1980年。
- 注100 西口陽一,『八雲遺跡発掘調査概要』Ⅰ, 大阪府教育委員会, 1987年。
- 注101 井上智博他,『尺度遺跡』Ⅱ (『(財)大阪府文化財センター調査報告書』第97集), 財団法人大阪府文化財センター, 2003年。
- 注102 藤井和久・広江耕史,『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ(勝負遺跡)』, 鳥根県教育委員会他, 1992年。
- 注103 岡本寛久他,『百間川原尾島遺跡』5 (『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106), 岡山県文化財保護協会, 1996年。
- 注104 宇垣匡雅他,『百間川原尾島遺跡』3 (『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88), 岡山県文化財保護協会, 1994年。
- 注105 宇垣匡雅他,『百間川原尾島遺跡』6 (『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179), 岡山県文化財保護協会, 2004年。
- 注106 薦田耕作・渡部明夫,『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊 矢ノ塚遺跡』, 香川県教育委員会他 1987年。
- 注107 山元素子,『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十八冊 川津東山田遺跡Ⅰ区』, 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター他, 2001年。
- 注108 副島邦弘他,『団後遺跡・西一丁田遺跡・炭山遺跡』, 福岡県教育委員会, 1994年。
- 注109 前掲注25文献による。
- 注110 周溝柱穴比は周溝半径÷柱穴半径とする。
- 注111 周溝幅柱穴比は周溝幅÷柱穴半径とする。
- 注112 周溝周壁比は周溝半径÷周壁半径とする。平地建物では周壁が不明な場合がほとんどで, 竪穴建物のみである。
- 注113 前掲注33と同じ。
- 注114 北陸の全時期を通じて旧拙稿(前掲注13)で竪穴建物の比較から周壁の位置が柱穴半径の1:2前後となることを示した。
- 注115 前掲注39と同じ。
- 注116 前掲注44と同じ。
- 注117 前掲注13と同じ。